

**明治国際医療大学**  
**業績報告書(年報)**  
**【抜 粋】**

**令和6年度**

# 巻 頭 言

学長 勝見 泰和

予測不可能な時代を象徴するトランプ米大統領は、「MAGA(アメリカを再偉大に)運動」のスローガンを掲げ、ディール外交により世界を翻弄している。このような時代においては、問題解決能力に優れた人材が求められる。本学においても単なる知識でなく、問題解決能力を培うための教育が一層求められることは間違いない。

令和6年度明治国際医療大学業績集(年報)の巻頭言を執筆するにあたって、この年報の目的を再考してみた。以前から述べてきたように、本冊子は各部門や各個人の自己点検・評価のための1年間の活動記録を纏めたものである。そして、ここから得られた情報を基に各部門・個人が次年度の目標を設定することが重要である。言い換えれば、本冊子を活用して大学のPDCAサイクルを効率的に、かつスピード感を持って廻すことが目的である。そしてPDCAサイクルを円滑に廻すためには、本冊子から各部署・各個人の横串としての情報を知ることも大切な役目である。

本書では研究業績プロにおいて、教員の業績が纏められている。研究業績プロでは記入する項目は幅広く、学歴、資格・免許、著書・論文歴、研究テーマ、学会活動、担当授業科目、社会における活動、学内外の委員会活動、講師・講演、課題と方策などである。さらに項目についても、視野の広い観点から記入することになっている。例えば、研究形態については著書、論文、その他の三つに大きく分類している。そして著書では学術書、事典・辞書・調書報告・教科書・一般書など細かく分かれている。論文では研究論文、速報・短報・研究ノート等(学術雑誌)、研究発表ペーパー・要旨、書評・論説、文献紹介など多岐にわたる。このように研究者・教育者の業績評価は難しく、幅広く大きな視点からの判断が必要であろう。

本学は令和9年度に日本高等教育評価機構による第4期認証評価を受審する予定である。学習成果の公表、研究面の独立した評価、学生からの意見収集、オンライン教育の効果検討などの新しい評価基準が要求される。この認証評価での適合を得るには、大学および教職員の自己点検・評価をしっかりとしておく必要があるが、何のため

の受審であるかをしっかり認識する必要がある。教学の質の向上などにより、予測不可能な時代に問題解決能力に優れた人材の育成することが本学の大きな目標である。

地方の中小大学は、少子化による入学者の減少という厳しい現実が、これからも毎年毎年押し寄せてくる。今回、私が考える「本学の中長期ビジョン」も掲載している。これが最良であるかどうか、短期・中期・長期の目標を着実に実行・修正しながら、一歩ずつ前進していきたい。

令和7年7月21日（海の日） 日吉にて

# 私が考える明治国際医療大学の中長期ビジョン

学長 勝見 泰和

出生率の低下に歯止めがかからず、2040年度には18歳人口は80万人を切ると予測されている。地方の中小私立大学は少子化に伴う収容定員確保という難しい課題を抱えている。このような状況下で安定的な大学運営をするためには、建学の精神のもとに特色のある教育を提供し、豊かで持続可能な地域社会で貢献できる人材育成に努めなければならない。そして目指す大学の将来像を明確にする必要がある。

## <教学について>

本学の教学の問題として、学生の学力の幅が広く、偏差値50以下のボリュームゾーンの学生が多いことが挙げられる。しかしながら、講義で学生に接してみると、このような学生達は磨かれていない原石のように感じられる。最新の教育学者による著書には、ボリュームゾーンの学生達は成功体験が少ないために低く評価されているが、教育の仕方によって今後の日本を担う人材となる可能性があると記されている。私の実体験でも、反転授業を応用したアクティブ・ラーニングで学生が生き生きとしたことがあった。教員にとって大変なことではあるが、教員の熱意と工夫が試されている時代である。

## <研究について>

研究力も大学のブランディングの一つである。基礎的研究でなくても、臨床や教育の現場では、研究対象の材料がたくさん転がっている。研究マインドは教育力を増すという相乗効果がある。大学では教育と研究は両輪であり、一方が欠ければ成り立たない。大学人は常に探求心をもって教育を実施し、大学院は中核の役目を担うべきである。

## <地域連携と外部資金の獲得>

地方創生に対する国策の一つに、デジタル田園都市構想がある。この構想の観点から、本学も「大学発！未来につながるまち・ひと・しごとづくり創生」を提案している。具体的には医療・東洋医学（養生）・スポーツ・農業（食）を活かした連携を想定している。欧米の有名私立大学は、寄付金を含めた外部資金の獲得に力をいれている。外部の教育・研究資金を獲得するには、地域産業や自治体との連携、そして同窓会の協力が必要である。現在、ふるさと納税による外部資金の獲得は実践されつつある。

## <入学定員の確保と将来の大学像>

安定的な大学運営で一番重要なことは、入学定員の充足と退学率の抑制である。本学には、立地条件から通学時間がかかるというマイナス面がある。しかし一方でそれは、自然の中で勉学に励むことができ、スポーツにも打ち込めるというプラス面でもある。新しく新設され

る予定の農学部は有機農業に特化したもので、地方共創とともに地域からグローバルに発信できる学部である。その学部がどれくらいの需要があるかの予測から、小さく生んで大きく育てるということが最良の策である。

長期的には、大学DXによる効率化、教職協働による適材適所の人事配置をさらに推し進めなければならない。地域及び学生にとって必要と思われる大学作りを追い求めたい。将来目指すべき大学像として、学費をできるだけ国公立大学に近づけるために、演習・実習以外は通信制大学に近い教育プログラムの大学を考えている。

# 教育活動の実績

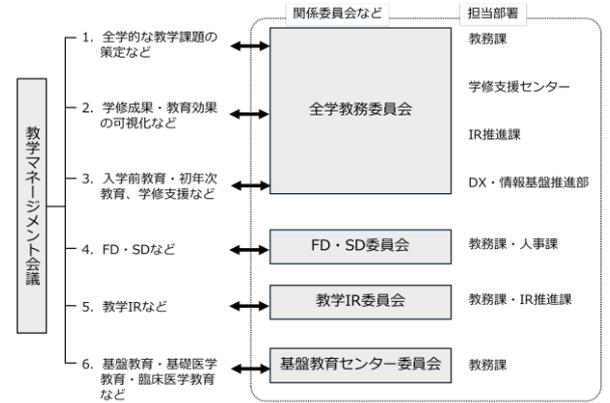
教務部長 福田 文彦

## 1. 内部質保証の充実

本学は、全学的な「内部質保証」を推進するため、教学運営の重要事項を検討し、教学改革を迅速に遂行することを目的として、令和3年度より「教学マネジメント会議」を設置している（令和6年度に一部組織改編を実施）。

令和6年度における主な取組は以下のとおりである。

- 大学の機能別分化の流れを踏まえ、地域社会および医療現場において「社会貢献のできる実践的人材の育成」に取り組んだ。
- 教育の対象となる学生は、いわゆるボリュームゾーンに位置する学生や、スポーツと医療系資格取得の両立を志す学生など多様な背景を有しており、正課授業および非正課活動（課外活動）を通じて、教育・研究・社会的実践を行うことのできる人材の育成に努めた。
- 教育面では、「学修者本位」の教育を実践した。すなわち、「教員が何を教えたか」ではなく、「学生が何を学び、いかに身につけたか」に主眼を置き、教学改革に全学的かつ組織的に取り組んだ。
- 正課授業は主として教員が、非正課活動は職員およびクラブ指導者が担い、教職協働による教育体制の構築を図った。
- 教育・研究の質保証に向け、教育活動の継続的な自己点検・評価を行うとともに、副学長を中心として、第4期認証評価（令和9年度受審予定）に向けた自己点検・評価を実施し、質の向上に努めた。これらの全学的な教学改革の成果により、文部科学省の「私立大学等改革総合支援事業（タイプ1）」および「少子化時代を支える新たな私立大学等の経営改革支援（メニュー1）」の対象校に選定された。



## 2. 入学前・初年次教育と学修支援体制の構築

ボリュームゾーンなどの多様な学生に対しては、入学前教育・初年次教育・学修支援体制の充実が重要な課題である。

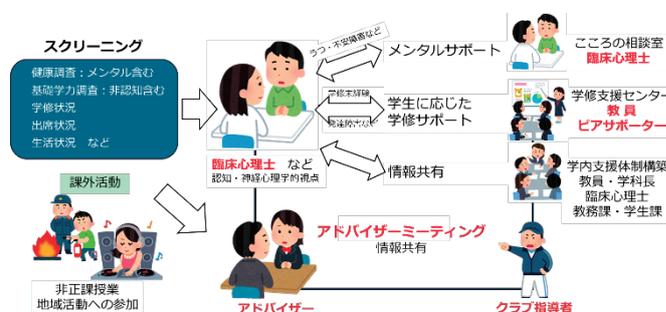
### 1) 入学前教育：学修支援センター、各学科

入学前教育は、入学手続きを完了した学生が、入学前に高等学校等から大学への円滑な移行を図り、「仲間と交流し、大学生活を意識する」「大学での勉強をイメージする」「課題を自ら遂行することに慣れる」ことを目標に実施している。実施にあたっては、Google Classroom、Google Form、Mellyを活用し、オンライン交流会、プレ授業、学科独自の課題などを展開している。

その結果、オンライン交流会の満足者は64.5%、モチベーションが高まったとする学生は55.8%、全体の満足度は77.9%であった。自由記述においても肯定的な回答が多く見られたが、「学校生活をもっと具体的に知りたい」「在校生と交流したい」といった意見もあり、今後さらなる工夫が必要であると考えます。

## 2)初年次教育・学修支援体制：学修支援センター、こころの相談室、各学科

入学前教育の延長線上に初年次教育があり、両者は連続したものであることから、初年次教育はその観点に立って実施している。これまでの分析により、大学4年間の高等教育において「初年次の学業成績と2年次以降の学業成績には強い相関性がある」ことが明らかになっている。したがって、初年次において高校生から大学生（生徒から学生）へと円滑に意識転換できるかどうか、その後の学びに大きく影響を及ぼす。ゆえに、学生に対しては「学びの質の転換」として、自律的な学修態度の育成を目指して初年次教育を実施している。



学修支援を要する学生は、高校生から大学生への移行のみならず、さまざまな課題を抱えている。具体的には、基礎学力や学修習慣の不足、発達障害に起因する自己効力感や自信の喪失などが挙げられる。これらの学生に対しては、安心して学べる環境を提供し、一人ひとりの能力を最大限に引き出すとともに、自律的学修者としての成長を促す人材育成が重要である。

このため、入学時には非認知能力を含む基礎学力調査に加え、心理面も含む健康調査や学修・出席状況、生活状況などの定期的な把握を行い、教職員や臨床心理士との面談を通じて、学習面・心理面の両面にわたる支援を提供する認知心理学に基づいた育成体制の確立を目指している。令和6年度は、その取り組みの初年度にあたる。

また、自律的に学修を進める学生に対しても支援が必要であり、学修支援センターと国際交流推進センターによるコラボレーション企画「世界を意識する英語で前進スピーキング」なども実施している。

その結果、新入生を対象とした「精神的健康調査」による早期対応の効果もあり、精神的理由による退学は減少した。しかしながら、成績不良による留年を理由とする退学が全体の約3割を占めており、今後さらなる支援体制の充実が求められると考える。

退学率	鍼灸学科	柔道整復学科	救急救命学科	看護学科	大学院	全体
在籍者数	150人	184人	307人	291人	39人	923人
退学者数	10人	7人	11人	8人	0人	36人
退学率	6.7%(8.6%)	4.1%(3.3%)	3.6%(2.3%)	3.0%(1.7%)	0%(0%)	3.9%(3.2%)

※令和6年度学院事業報告より

## 3. 教育DX・教学IRの推進：データの見える化

全科目において「Google Classroom」の活用を推進し、ICTを活用した教育計画を策定し

た。ICT教材や復習用動画教材の利用促進を目的として、教職員向けにICT研修を実施し、スキル向上に努めた結果、授業における活用率は従来の56%から76%へと大幅に向上した。また、文部科学省の通知に基づき、「生成AI使用に関するガイドライン」（令和7年4月施行）を整備し、教育現場における適切な活用を推進した。

学修の可視化に向けては、「Assessor」を導入し、ディプロマ・ポリシー（DP）の調整、DPと科目対照表の整合、シラバスの記載内容の見直し、授業評価アンケートの改訂を行った。令和6年度は移行期間と位置づけ、令和7年度からの本格運用に向けた準備期間とした。

入学属性による学籍異動リスクおよび学習状況については、教学IR委員会を中心に科目別GPAの分析を実施し、次年度に向けた教育内容の自己点検を行うとともに、令和8年度から実施予定の教育課程（学位プログラム）に関する参考資料とした。

#### 4. 新教育課程、農学部開設の準備

全学科において教学IRの分析に基づき、学年制から単位制への移行、学科共通プログラムの開講、日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー（JSP0-AT）の資格取得を目指す新たな教育課程（令和8年度実施予定）の編成・検討を進めた。また、令和9年開設予定の農学部食農エコロジー学科についても、その編成・検討を進めた。

#### 5. 国家試験合格率

国家試験合格率の向上を目指し、教学IRにより学生の弱点科目を把握し、学外模試を活用して成績不良者の早期発見および個別支援を実施した結果、はり師・きゅう師・救急救命士・看護師・助産師のいずれにおいても、新卒における全国平均を上回る合格率を達成した。

	はり師	きゅう師	柔道整復師	救急救命士	看護師	保健師	助産師
合格率	96.8%	96.8%	53.6%	95.3%	97.3%	92.9%	100%
全国平均	89.6%	90.0%	75.9%	94.6%	95.9%	96.4%	99.3%

※令和6年度学院事業報告より

#### 6. これからの教学方針

##### 1) 内部質保証の充実

本学が育成する人材は、ボリュームゾーンと呼ばれる学生や、スポーツと医療系資格取得の両立を目指す学生など、多様な背景を有している。これらの学生を、地域や医療の現場において「社会貢献ができる実践的人材」「ひとやまの健康を守る人材」として育成するためには、正課授業および非正課授業（課外活動）を通じた教職協働による取り組みが必要である。そのためには、下記に示す項目の充実に加え、DX（デジタルトランスフォーメーション）化および情報の共有化による風通しの良い教育環境の整備、現代の学生に即した教育方法への対応、自己点検・自己評価の強化が必要であると考えます。

##### 2) 学修支援体制の充実

学修支援は、基礎学力や学修習慣の不足が見られる学生のみならず、本学で学ぶすべての

学生を対象とする必要がある。そのためには、教職員、学修支援センター、こころの相談室、図書館、課外活動指導者が連携した支援体制の構築が不可欠である。また、学生の知的好奇心や社会貢献意欲を喚起・支援する仕組みの整備も重要であるとする。

### **3)教育内容や教育方法の充実、新教育課程および農学部開設の準備**

教育内容については、鍼灸学科、柔道整復学科、看護学科、救急救命学科において、「社会貢献ができる実践的人材」や「ひとやまちの健康を守る人材」の育成を目指した新たな教育課程（学位プログラム）の検討およびその実施に向けた準備段階にある。また、農学部食農エコロジー学科については、設置申請に向けた準備を進めており、本学の教育目的や学生の特性に即した内容の精査を行っている。加えて、現在の学生に適した教育方法の観点からは、ICTの活用、対面授業からブレンディッド型授業への転換、反転授業などのアクティブラーニングの導入など、時代の要請に応じた教育改革が求められるとする。

# 研究活動の実績

研究部長 林 知也

大学の使命は教育と研究、およびそれらの基盤とした社会貢献であると捉えている。それらを円滑に進めていくためには潤沢な資金調達が必要である。本学のような私立大学の収入は、学生の授業料納付金に依存する割合が高く、その資金だけで円滑な大学経営を執行し、かつ研究をより大きく発展させていくことは難しい。それゆえ、各種補助金・公的競争的資金等の外部資金を獲得し、各研究分野における最先端の研究および基礎研究、地域に根差した研究等を推し進め、さらなる研究資金の獲得に繋げて研究を発展させることにより、大学を活性化させることが今後ますます必要となると考えている。本年度（2024年度）には、そのような考えのもと、「明治国際医療大学 外部資金の獲得に向けた計画」を策定した。その計画では、大学全体として各種補助金を獲得するための改革を進めることは勿論のこと、各研究者が公的競争的外部資金等の申請にチャレンジして多くの外部資金を獲得するために各研究を推し進めるための環境づくりを基盤としている。

本学における研究活動の支援は、もともと各研究者の研究を推し進めるためことを基盤としていたが、本年度（2024年度）は、上記した外部資金獲得に向けた研究環境づくりも意識して行った。概略を項目に分けて以下に記す。

## 1) 学内研究助成

### ① 2023年度の学内研究助成に係る研究成果発表会

- ・日時：2024年9月27日（金）（当初8月30日開催予定が台風の影響で変更）
- ・実施形式：対面形式とGoogle Meetによるオンライン形式のハイブリッド開催
- ・開催場所：2号館3階大教室

ここ数年来、単年度ごとの学内研究助成に係る研究成果報告書提出と研究成果発表会実施は、翌年度に設定されてきた。本年度の発表会は、多くの方に参加してもらうことを目的に、対面形式とオンライン形式のハイブリッド開催とした。コロナ禍ではほぼ強制的にオンライン形式での研究発表や打ち合わせ、講義等を行った経緯から、各研究者のこの形式に対する技術的問題はほとんどなくなっている。若手研究枠で12件、養生に関する研究枠で8件、重点研究で1件の発表が行われ、活発な質疑応答も行われた。

### ② 2024年度学内研究助成

2022年度から大学院生の研究サポートも目的に、教員だけでなく、大学院生も応募対象としている。2024年度からは、外部資金獲得の前に必要となる各研究者の研究基盤形成のための助成という意味合いをより強くし、教員の採択者に対しては2年以内に科学研究費助成事業（科研費）に応募することを義務化した。予算は助成全体で500万円とし、若手研究と、講座横断的な研究グループでの応募を前提とした基盤研究の2つの枠

を設けた。応募件数は2020年度の28件、2021年度の24件、2022年度の28件、2023年度の26件に比し、2024年度は18件であった。残念ながら2023年度よりも件数が大幅に減少した。具体的な採択状況として、若手研究枠214.1万円（10件）、基盤研究枠67.3万円（1件）の計281.4万円の配分であった。

#### 2) 2024年度全学横断的シンポジウム

本年度は、「養生を含む病気の予防について」を基本テーマに、産学連携を主とし、学外より企業を招き、本学の研究を企業にアピールすることで今後の共同研究の発展につなげるシンポジウムを企画した。企業の協力が必要なため、調整に時間がかかり、2024年中の実施ができなかった。2025年度に継続して行うことで調整中である。

#### 3) 2024年度全学研究ポスターワークショップ

- ・ポスター掲出期間：2025年3月3日（月）～3月24日（月）
- ・ポスター掲出場所：10号館1階メディカルフュージョンラウンジ
- ・口頭によるポスター説明：3月5日（水）

本ワークショップは、学内の研究者の交流を目的として毎年実施されており、本年度も昨年度と同様に、教育の業務がやや落ち着く年度末に実施した。

昨年度の11件に比し、本年度は14件と、発表数が少し増加したが、コロナ禍前の状況と比べると発表件数は少なかった。しかし、活発な質疑応答が行われ、研究者間の交流は十分に行うことができたと考える。

#### 4) 2024年度外部資金受け入れ状況など

2024年度外部資金受け入れ状況を次頁以降に表で示す。

科学研究費補助金受け入れによる研究は、新規採択3件（基盤研究（C）2件、若手研究1件）、継続6件（基盤研究（C）6件）、期間延長5件の計14件が行われた（表1）。また、他研究機関から本学への分担金は5件が配分された（表2）。

科学研究費以外の外部資金の受け入れとしては、科学技術振興機構（JST）の助成金受入れによる研究が1件行われた。その他、新規奨学寄付金による研究が3件、研究費受入れによる共同研究が1件行われた（表3）。

(表1)

## 令和6年度 科学研究費助成事業 (科研費)

## 【交付助成金】

採択年度	研究種目	研究代表者 所属職	研究代表者 氏名	研究課題	交付金額 ※R6年度	
					直接経費	間接経費
2024年～ 2026年	基盤研究 (C)	臨床医学講座 准教授	足立 孝臣	microRNA-335を標的とした新しい糖尿病・動脈硬化同時治療の開発	1,400,000	420,000
2024年～ 2026年	基盤研究 (C)	看護学講座 准教授	小西 奈美	薬物依存症を抱える女性の「身体感覚」に着目した依存症回復支援の検討	2,100,000	630,000
2024年～ 2026年	若手研究	臨床医学講座 講師	林 大智	人工知能(AI)を用いた骨肉腫術前化学療法の効果予測システムの構築	800,000	240,000
2023年～ 2025年	基盤研究 (C)	基礎医学講座 准教授	榎原 智美	希突起膠細胞が束ねる軸索の発火特性は同調するか	1,200,000	360,000
2023年～ 2025年	基盤研究 (C)	看護学講座 講師	工藤 大祐	手指巧緻性と成功失敗要因から検証する高齢者に適した点眼支援	1,200,000	360,000
2022年～ 2024年	基盤研究 (C)	基礎教養講座 准教授	河井 正隆	大学教育における伝統医学(鍼灸)のモデル・コア・カリキュラムの構築と検証	1,500,000	450,000
2022年～ 2024年	基盤研究 (C)	臨床医学講座 教授	浅沼 博司	遠隔虚血コンディショニングによる心不全発症・進展抑止効果とそのメカニズムの検討	800,000	240,000
2022年～ 2024年	基盤研究 (C)	臨床医学講座 客員講師	林 和子	脳波の傍1Hz徐波の動態解析を用いた高齢者の麻酔モニタリング法の開発	700,000	210,000
2022年 2023年(延長) 2024年(延長)	研究活動スタート支援	救急救命学講座 助教	村上 龍	法医学的情報に基づく自殺実行リスク評価法および予防因子の解明	0	0
2021年～ 2023年 2024年(延長)	基盤研究 (C)	柔道整復学講座 教授	齊藤 昌久	いつでも速歩トレーニングが体力・認知機能に及ぼす影響:クロスオーバー試験	0	0
2020年～ 2022年 2023年(延長) 2024年(延長)	若手研究	鍼灸学講座 准教授	齊藤 真吾	鍼通電の効果を予測する因子についての検討	0	0
2020年～ 2022年 2023年(延長) 2024年(延長)	若手研究	臨床医学講座 准教授	足立 孝臣	血管内皮細胞マイクロRNAを介した新しい動脈硬化治療の開発	0	0
2019年～ 2024年 【中断 2019年 8月22日～2022 年8月22日】	基盤研究 (C)	鍼灸学講座 特任准教授	鶴 浩幸	耳鳴軽減に東洋医学的体性感覚刺激や耳鳴反応点を用いる治療法確立のための基礎的研究	600,000	180,000
2019年～ 2021年 2022年(延長) 2023年(延長) 2024年(延長)	基盤研究 (C)	臨床医学講座 客員講師	林 和子	多層ニューラルネットワーク深層学習を用いたポワンカレ統合麻酔深度推定スコアの開発	0	0
					10,300,000	3,090,000

(表2)

## 令和6年度 科学研究費助成事業 (科研費)

【他研究機関から本学への分担金】

採択年度	研究種目	研究代表者所属・職・氏名	研究分担者所属・職・氏名	研究課題	他大学より分担金 (単位:円)	
					直接経費	間接経費
2024年～ 2027年	基盤研究 (C)	大阪経済大学 人間科学部 教授 大橋 純子	看護学講座 教授 桂 敏樹	ネットワーク脆弱地域の高齢期の閉じこもり改善重層的ケアシステムモデルの構築	10,000	3,000
2024年～ 2026年	基盤研究 (C)	京都府立医科大学 医学研究科 講師 高橋義信	臨床医学講座 准教授 武内 勇人	膠芽腫オルガノイドを用いたネオアンチゲン免疫療法の基盤的研究	20,000	6,000
2024年	基盤研究 (B)	生理学研究所 システム脳科学研究領域 福永 雅喜	客員研究員 梅田 雅宏	ヒト全脳皮質層別イメージングとMR分光画像法による脳回路制御動態描出法の開発	400,000	120,000
2022年～ 2024年	基盤研究 (C)	朝日大学 経営学部 准教授 神谷 真子	救急救命学 講座 教授 智原 栄一	鎮静・麻酔薬による腫瘍内免疫細胞の細胞間ネットワークの改変とそのメカニズム	50,000	15,000
2021年～ 2025年	基盤研究 (A) (補助金)	量子科学技術研究 開発機構 量子医科学研究所 上席研究員 青木 伊知男	基礎教養講座 講師 河合 裕子	低侵襲性の反応性ナノ・マンガニ造影剤開発による「MRI病理組織変性解析法」の創成	750,000	225,000
					1,230,000	369,000

(表3)

## 令和6年度 外部資金一覧表

区分	件数	受入額	備考
科学研究費助成事業 (科研費)	14	14,989,000	※間接経費含む
文部科学省事業(JST)	1	2,200,000	先端研究基盤共用促進事業 ※間接経費含む
受託研究	0	0	
奨学寄附金	3	3,920,000	SECカーボン(株)、 公益財団法人日本生命財団、 (株)RAKUSHO
共同研究	1	2,200,000	オムロンヘルスケア(株)
寄付講座	1	300,000	セイリン(株)
市販後調査	1	275,000	田辺三菱製薬(株)
地域事業補助金	2	590,000	南丹市まちづくり交付金 京都プロジェクト共同事業費補助金
外部助成金	1	4,000,000	公益財団法人小林財団
合 計	24	28,474,000	

鍼灸学科 PDCA表

令和6年度		鍼灸学科 (初年次教育) PDCA表		PLAN (計画) の内容：学力的な問題による退学者数及び留年者を0にし、2年進級時に必修科目の単位取得率100%の者を80%以上にする。例年未修得者が多くなる解剖学Ⅰ・Ⅱ生理学Ⅰ・Ⅱの単位取得者をクラス全体の90%以上にするために、学力に問題がある学生を抽出し、面談によって勉強への取り組み方や勉強の仕方を聴取してその対応を検討し、個別に対応することで学力向上を目指す。また、出席数の不足によって評価を受けることができなくなる学生を未然に防ぐ。さらに、退学や休学の原因となる大学への不適応感の形成を防ぐ。			
PLAN (計画)		DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)	
P：目標を実現するための具体的な方法を考える		D:計画を実行しその効果を測定する。		計画実施率 (%)	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
1. 学力に問題がある学生の抽出 2. 1の学生に対する勉強の個別対応 3. 出席状況を常時モニタリングする 4. 面談や日常的なコミュニケーションによる大学生活への不適応感の形成を防ぐ 5. アドバイザーと教務助手が連携した学生のサポート		1. 入学前教育の課題、国家試験科目の小テスト、前期中間試験結果を参考に低学力者を抽出する。 2. 1. で抽出した学生に対して個別で勉強の指導を実施する。 3. 出席基準が厳しい実習科目では、1回欠席で注意を促し、2回目の欠席で嚴重注意を行う。 4. 定期的な面談を実施し、日常から声かけを積極的に行って学生の状況を把握する。 5. アドバイザーと教務助手が連携し、成績不良者への面談や勉強の方法を教えるなど、細かなサポートを行う。		100%	1、2. 解剖学Ⅰ、生理学Ⅰの小テスト結果から、得点率が5割未満の学生(27/53名)を抽出し個別対応を行った。単位修得率は解剖学Ⅰ92.3%、解剖学Ⅱ77.4%、生理学Ⅰ86.8%、生理学Ⅱ81.1%で、1年終了時に必修科目の単位取得率100%の者は38/53名(71.7%)であり、留年者は5名(うち退学5名)であった。 3. 出席基準を下回ったことにより不可(受験不可)となった学生は5名いた。 4. 前期と後期に面談を実施した。勉強に問題がある学生はその都度呼び出して面談を行った。 5. 試験前だけでなく日頃から勉強に不安のある学生に対して個別対応を行った。	1、2. 基礎学力テストの結果と単位修得率は必ずしも一致していなかったが、解剖学、生理学の小テストが指標となった。 3. 本人だけでなく保護者とも連携したが、受験不可を防げなかった。 4. 実行した。 5. 学力が向上しているのかを評価できていなかった。	1、2、4、5. 100%単位修得者が目標を大きく下回ってしまったため、解剖学Ⅰ、生理学Ⅰの小テストを基準に、低学力者の抽出を速やかに実施し、個別面談を実施してそれぞれに合った勉強法を提示する。また、勉強の進捗を随時確認してフィードバックを繰り返し行う。 3. 科目担当者にも協力を求め、週に1回出席状況を確認し問題のある学生に面談を行って注意を促す。 1～5. 退学者が5名出た。学力的な問題と、大学への不適応感(ミスマッチ)による退学であったため、学力の問題だけではなく職業イメージを持たせるような取り組みを行う。

鍼灸学科 PDCA表

令和6年度		鍼灸学科 (国家試験対策委員会) PDCA表		PLAN (計画) の内容： 令和3～5年度のデータ（未修得科目数と合格率および模擬試験得点と合格率など）に基づいた具体的な目標を学生に提示し学修指導を行う。これにより3年生の国家試験の合格率を全国平均以上とし修了認定率を90%、新卒4年生および既修了認定者の合格率を90%以上とする。			
PLAN (計画)		DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)	
P: 目標を実現するための具体的な方法を考える		D: 計画を実行しその効果を測定する。		計画実施率 (%)	C: 目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由/課題/根拠データ等	A: 課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
1. 令和6年度の国家試験対策年間計画を策定し、学生に配布する。 2. 国家試験対策チームを編制する（齊藤、鶴、多田羅、教務助手）。 3. 第32回はり師・きゅう師国家試験結果と3年生進級時の学修状況（未修得科目）と模擬試験結果との関連について調査分析する。 4. 明治東洋医学院専門学校との合同模擬試験の2回と外部模試2回実施。 5. 模擬試験の成績不振者に対する面談とデータに基づく学修指導。 6. 学生の特性に応じた学修環境の設定。 7. 国家試験対策科目のアーカイブ化。 8. 夏期、冬期の補習。 9. 受験年次の希望調査。 10. 自習状況の確認。		1. 策定し、配布済み。 2. 編成済み。 3. 調査分析済み。結果は令和6年度オリエンテーション期間で3年生にフィードバック済み。4年生については、個別面談時に伝えた。 4. 専門学校と合同模擬試験を2回実施、外部模試（ジャパン模試・学校協会）実施。 5. 第1回模擬試験結果（得点率45%未満）に基づいて面談実施済み。当該学生に対して補習参加及び課題を提出させる。今後模擬試験ごとに実施予定。 6. 面談時に学生の学習環境を確認し、必要に応じて教員室周囲での学修を推奨。 7. 令和6年度授業内容に基づいて実施 8. 対象者、期間については、学生に伝達済み。今後実施予定 9. 面談時に確認済み。面談学生すべて3年次受験希望。 10. 名簿を作成し、管理した。		100% 実施	1. アンケートでは、7（1～10で評価）以上の評価が75%であった。 2. 毎週1回、国試チームでミーティングを行った。 3. 面談時に過去データをみせることで、学生のモチベーションを高めた。 4. 作成者が異なる問題を用いることで、学生がさまざまな問題に触れることができた。 5. 模試前に面談基準を設け、基準以下の学生に対して面談を行った。 6. 前期は教員室周囲に自習に来ている学生に対して積極的に介入し、後期は自学自習でわからないことを質問させる環境とした。後期は、グループで教え合う状況が多くみられた。 7. 国家試験対策授業は、録画してアーカイブ化することで、復習できる環境を整えた。 8. 夏期は3科目（解剖、生理、各論）を融合した授業を行い、冬期は1月中旬から国家試験前日まで模擬試験を実施した（アンケート調査からは、7以上が夏65%、冬85%と高評価であった）。 10. 自習対象者の8割近くが自習に来ていた	自己採点時のアンケート調査	第33回はり師きゅう師国家試験の自己採点の結果では31名中30名が基準点をクリアしている。そのため、今回のPDはある程度効果があったものと考えられる。しかしながら、修了認定が下りなかった学生が、3年生は7名、4年生は3名となっている。これらの学生に共通している点は、モチベーションが低い、自習に読んでも来ない、本気で勉強をはじめると時期が遅い、などである。そのような学生に対しては、何度も面談を行い指導を行ってきた。今後は、保護者を交えた指導、チューター制による個別指導などが必要である。

鍼灸学科 PDCA表

令和6年度	鍼灸学科 (キャリア支援) PDCA表		PLAN (計画) の内容：昨年度の進路決定率は100%であり、今年度も同様に100%を目標とする。また、スポーツ関連学生にはトレーナー志望者が多いが企業の受け皿が少ないため、学生のニーズに答えられるだけの企業の掘り起こしが急務であり、そのことも踏まえた対策を含めて活動を行う。就職率100%達成のための施策として、求人情報の整理と共有、合同就職説明会の早期開催と内容の精査、一般職希望学生への支援強化を骨子として活動を行う。		
PLAN (計画)	DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率 (%)	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
1.就職アンケートと面談の実施 2.求人検索NAVIの有益性・利活用の向上 3.合同企業説明会の企画・運営・差別化 4.進学、一般職希望者への対応強化 5.各学科のキャリア情報の集約と共有	1.4月末時点で就職アンケートと面談を実施し、詳細な進路希望の聴取まで完了予定。 2.4月末時点で求人情報の整理ならびに求人検索NAVIの周知を完了する。企業面談を積極的に実施し、内容反映を逐次行う。 3.合同企業説明会を7月までに2回計画し、内1回はトレーナー希望者向けの内容を計画する。 4.進学や一般職希望者には個別に対応する。進学説明会を前期に実施し、一般職希望者には「京都新卒応援ハコワーク」の活用を促すなど、早急な就職活動を指導する。 5.キャリア支援委員会を中心に、各学科の情報集約、情報共有を行う。	100%	1.4月実施の就職アンケートと面談に基づき、学生の就職希望状況は把握できた。 2.キャリア支援室の利用に関して学生に周知し、求人検索NAVIに企業面談の結果の掲載を開始した。 3.合同企業説明会を7月までに2回実施した。2回目の開催ではトレーナー、美容領域を特徴とする治療所を優先的に招き、トレーナー志望者を含めた学生ニーズにもある答えることができた。 4.進学、一般職希望者に関しては進学説明会の開催と個別対応の結果、遅滞なく進路決定できた。 5.キャリア支援担当者に情報集約・共有を行い、問題発生時にはキャリア支援委員会にて共有した。	1.学生アンケート、2.学生SNSの履歴ならびに求人検索NAVIの利用履歴、3.合同企業説明会のパンフレット、学満足度調査、4.進路決定届、5.1-4の資料の共有を評価の根拠としている。	1.学生の希望進路について、一般職を含め早期から具体的な内容を把握する必要がある。 2.求人検索NAVIに掲載される企業面談の結果を増やす必要がある。 3.スポーツ関連学生の進路の幅を広げるため、引き続きトレーナー活動を行っている企業を優先的に合同企業説明会に招待する必要がある。 4.進学に関する説明会の時期を早める必要がある。 5.キャリア支援委員会の定期的な開催による学科間の情報共有が必要である。

柔道整復学科 PDCA表

令和6年度		(柔道整復学科・入学前教育) PDCA表		目標：入学後の学修に備えて、グループ学習を通じ学生間の交流を深める。					
PLAN (計画)		DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)			
P: 目標を実現するための具体的な方法を考える		D: 計画を実行しその効果を測定する。		C: 目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。		A: 課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。			
1. 対面での開催を1~2回実施 2. グループワークを実施 3. IT機器の利用習熟		1. ☑oogle classroom、Google formsを使用した課題を実施する。 2. ☑oogle Meetを使った交流会を実施する。 3. ☑基礎医学等の基本的な内容について学修する。		100%		1. 目標は達成。オンライン教室参加率83%と昨年に比べて高かった。 2. 課題の提出率は、次のとおりであった。 11月 柔整 62% 全学科42% 12月 60% 35% 1月 45% 30% 2月 35% 20%		1. 入室時のトラブルは、今年度はなく、スムーズであった。 2. 今年度の課題提出は、昨年度以上にメリーでコマ目に督促を行った。このことが提出率増加の要因と考えられる。	

令和6年度		(柔道整復学科・初年次教育) PDCA表		目標：職業の理解と将来目標の設定、留年・退学者数の減少					
PLAN (計画)		DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)			
P: 目標を実現するための具体的な方法を考える		D: 計画を実行しその効果を測定する。		C: 目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。		A: 課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。			
1. 学習目的を明確にする。 2. 学習意欲を高める。 3. 能動的・自律的な学習習慣を確立する 4. 柔道整復師の業務を理解する 5. アカデミック・スキルを修得する。		1. 面談を実施し個別指導を行う（年2回以上）。 2. 成績不良者の対応 ・小テスト、中間テストの実施により成績不良者の早期発見、早期対応を行う。 ・アドバイザーは科目担当者、学習支援課と連携し成績不良者の情報を共有する。 ・アドバイザー、科目担当者、クラブの顧問と連携し学習指導を行なう。 ・“plus one”の活用し学習習慣を身に付ける。 3. 職業紹介と、模擬実習（early expousure）を実施する。		100%		1. 前期・後期の面談及び成績不良者、出席状況が悪い者に対して面談を実施することができた。 2. 学習支援やクラブだけでなく「こころの相談室」とも連携し、中間テストの補講はplus one、期末試験の補講は休暇期間中に実施した。 3. 就職説明会への参加を促すことができた。		計画通り低学力者の早期発見・学習指導を行うことができた。しかしながら、単なる学習指導だけでは成績不良者を減少させることはできなかった。	

柔道整復学科 PDCA表

令和6 年度		(柔道整復学科・基礎科目) PDCA表			目標：柔道整復学科基礎科目の理解		
PLAN (計画)		DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)	
P: 目標を実現するための具体的な方法を考える		D: 計画を実行しその効果を測定する。		計画実施率 (%)	C: 目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由/課題/根拠データ等	A: 課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
1. 国試に関連した知識の習得 2. 成績不振者の減少		1. 専門科目と連動した基礎科目の教育を実施。 2. 国家試験出題基準に準じる内容の教科書使用。 3. Googleフォームを利用した小テスト実施の継続。 4. 昨年までの小テストや期末試験の結果から学生の理解度が低い内容の把握と、それらの内容の理解度を深めさせるための授業改善。 5. 必要に応じてプラスワンでの補講実施、もしくはオンデマンド形式での補講実施。		100%	・ 専門科目と連動した教育課程に従って、シラバスを作成。 ・ 各分野ごとに内容を細分化したシラバスに沿って授業を実施。 ・ 全国柔道整復学校協会監修の教科書を使用。 ・ 国家試験出題基準と過去問題を把握した上で、教科書だけでは理解しがたい部分を補足し、学生が理解しやすい授業を実施。 ・ Googleフォームでの小テストを数多く実施し、知識の確認と修得を効率良くサポート。 ・ 昨年までの小テストや期末試験の結果から、学生の理解度が低い内容を把握し、今年度の小テストや授業において、それらをより理解しやすいように工夫。 ・ 科目により実施回数にバラツキがあるが、プラスワンでの補講を実施。ほとんどの科目で、オンデマンド形式での補講を実施。 ・ オンデマンド補講、講義資料の配布、Googleフォーム使用時にGoogle Classroomを活用。	・ 小テストや期末試験での正答率の低い内容を、学生の理解度が低い、もしくは苦手な内容として把握。 ・ 解剖学系、生理学系(実習を含む)で、単位修得率はそれぞれ89%と88%。 ・ 入学時の学力のばらつき拡大が課題。	・ 正答率が低い内容について、より理解を深めさせるために講義資料を改善。 ・ 学力のばらつきを考慮した種々の形式での授業を検討・実施。 ・ プラスワンでの補講とオンデマンド補講の更なる増加。

令和6 年度		(柔道整復学科・柔整専門科目) PDCA表			目標：柔道整復学科専門科目の理解		
PLAN (計画)		DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)	
P: 目標を実現するための具体的な方法を考える		D: 計画を実行しその効果を測定する。		計画実施率 (%)	C: 目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由/課題/根拠データ等	A: 課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
1. 柔道整復師の基礎知識と技術の習得で柔整学の科目で単位修得者100%とする。(実技・実習・講義) 2. 国家試験に準じた授業内容の強化し、校内模試で柔整領域で60%とする。		1. 定期試験で理解力に問題がある学生に個別指導を行う。 2. 模試にむけてのサポートを行う。		100%	定期試験で、当該科目において、授業内容の理解が及ばず、合格点に達しなかった学生に対する対応は科目担当者によって、その手法は違っていたが、全体的なサポートとして、課題や補講を行った。個別の対応は、学生からの質問対応の形で行っている場合が多かった。 模試に向けてのサポートは、3年生は各模試で強化科目を設定し、過去の問題からの出題としたことで、過去問題集による修学を進めることができた。4年生については模試終了後に、解説を全体に行っていたが、個別の対応は学生からの質問対応の形で行っていた。	模擬試験用紙と模範解答はMicrosoft Teams参照 解説講座は、Google Calender参照	計画を実行するための施策は概ね計画通りだったが、結果として、単位習得者を100%とすることができず、校内模試で柔整領域の正答率を60%に上げることができなかった。 個別指導を学生主体にしたことに原因があると考えられるので、今後は、指導者が主体となって、学生の能力の応じた個別対応ができるよう検討していく。

柔道整復学科 PDCA表

令和6年度		(柔道整復学科・学外実習) PDCA表		目標：学外実習における教育効果の向上				
PLAN (計画)		DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)		
P: 目標を実現するための具体的な方法を考える		D: 計画を実行しその効果を測定する。		計画実施率 (%)	C: 目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。		評価の理由/課題/根拠データ等	A: 課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
1. 付属病院でのチーム医療について理解 2. 接骨院での業務の把握 3. スポーツ現場におけるケア活動の理解 4. 介護施設での業務体験		1. 各種実習の評価をその実習に適したルーブルック表にて評価する。 2. 実習に関するレポートを作成し提出する。		100%	すべての臨床実習で変更したルーブリック表に沿って評価を行った。また、前年度に活用したルーブリック表の内容のうち実習中の態度について評価基準を一部見直した。このことで、昨年度よりも計画の実現可能性について、より客観的な評価が可能になった。		ルーブリック表はGoogle drive参照 レポートはgoogle classroom参照	実習後レポートはすべての実習で作成されており、その課題は計画の達成に寄与するよう設定されている。しかし、より一層の計画達成度向上のために計画の達成度が自己評価できる内容を盛り込んだ課題を検討していく。

令和6年度		(柔道整復学科・国試対策) PDCA表		目標：国家試験合格率の改善				
PLAN (計画)		DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)		
P: 目標を実現するための具体的な方法を考える		D: 計画を実行しその効果を測定する。		計画実施率 (%)	C: 目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。		評価の理由/課題/根拠データ等	A: 課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
1. 国家試験対策委員会を編成し、教員全員で国家試験対策に挑む。 2. 模擬試験の実施 3. データによる個人の弱点のみえる化		1. 委員会による担当科目や対策の具体化と実行。 2. 個別面談によるスクリーニングの実施。 3. 模擬試験を8回実施(学内4回、学外4回)。 4. データを利用し、個別指導の充実。		100%	国家試験対策委員会として学科会議等で模試の結果について報告し、補講や個別指導(チューター制度)などの具体的な対策を行った。4年生に関しては、国家試験受験の意思も含め学生と数回面談を実施し、国家試験に対する意欲や、学習に困ったことがないか等、頻繁に確認を行った。3年生に関しては4年生から国家試験にかかる科目が選択となるため、模試の結果を元に今後についてや勉強方法等について支援する形で個別面談及びグループ面談を数回行った。模擬試験は合計10回行い、当初の8回の予定よりも多く実施することができた。その模試によって得られたデータや毎日問題によって得られたデータをグラフ化し、見える化を行うことによって個々の苦手が分かるようにし、個別指導の際に役立てた。		学科会議議事録 面談記録 日程表(カレンダー) 毎日問題及び模試の結果に関するデータ	1. データの活用方法のさらなる改善 アセスメンター等を用いてデータの分析方法やフィードバックの頻度をさらに向上させる必要がある。  2. 学生のモチベーション維持 一定数国家試験を受験しない学生がいたことから、より学習達成度のフィードバックを増やしたり、目標設定をより明確化するなどして、学生のモチベーションを維持・向上させる施策が必要と考えられる。  3. グループ学習の検討 1人で学習している学生がしばしば見られた。本年度の4年生学生の特性から、グループ学習の活用は難しかったが、教員ではなく学生同士が話し合い、学習できる環境を作れるよう、やはりグループ学習を検討する必要がある。

柔道整復学科 PDCA表

令和6年度		(柔道整復学科・就職) PDCA表		目標：就職率の向上	
PLAN (計画)	DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)
P: 目標を実現するための具体的な方法を考える	D: 計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率 (%)	C: 目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由/課題/根拠データ等	A: 課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
1.接骨院見学実習 2.進路ガイダンス 3.キャリア教育 4.合同企業説明会・体験会	1.接骨院見学実習(1年生) 2.進路ガイダンス(4年生科エンゲージ) 3.キャリア教育(4年生授業8コマ) 4.合同企業説明会・体験会(5月、7月)	100%	1.計画した4項目においてすべて実施できた。 2.今後、公務員や一般就職を希望する学生の増加が予想されるため、進路ガイダンスには3年生の参加も必要だと考えている。 3.合同企業説明会は夏季休暇前に実施したことで夏季休暇中の接骨院見学へとつながった。	1.実習レポート課題 2.授業アンケート 3.説明会参加数 4.就職率	1.実習先の検討 2.進路ガイダンスの対象学年の再考 3.合同企業説明会の時期および内容の検討

令和6年度		(柔道整復学科・研究活動) PDCA表		目標：研究活動の活性化	
PLAN (計画)	DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)
P: 目標を実現するための具体的な方法を考える	D: 計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率 (%)	C: 目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由/課題/根拠データ等	A: 課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
1. 学内研究助成の申請、実施を行い研究活動の活性化 2. 外部資金を獲得し研究活動を充実 3. 論文の掲載	・学内研究助成により研究の基盤を作成 ・科研費など外部資金獲得に向け研究内容の充実 ・大学誌やその他雑誌に論文・研究活動を投稿	70%	1. 学内研究助成は2件、1件は認定され 2. 外部資金の申請は2件あったが、獲得はできなかった。 3. 論文の掲載は5本アクセプトされた。本年度は4本掲載される。 (英論文3本、日本語1本)	1. 申請数 2. 申請数 3. 論文数	1・2. 申請数が少ない、お互いの強みを知り、作業を分担できるようにする。 3. お互いの研究の強みを知ることにより、共同研究を行う。

## 救急救命学科 PDCA表

### 国家試験計画

令和6年度	救急救命学科 PDCA表		PLAN (計画) の内容：国家試験合格率の改善		
PLAN (計画)	DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行し効果を測定する。	計画実施率 (%)	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い次へのPLANへ繋げる。
1. ゼミ毎の国家試験合格に向けた学生の個別支援体制の確立。 2. 模擬試験の予定及び結果解析と個別指導への反映。 3. 国家試験全員合格を目標とした強化クラスへの講義。	1. 成績不良学生の個別指導と補習授業を実施。 2. 模擬試験の時期と回数を検討し結果解析から個別指導を実施。 3. 分野別に各教員で特別講義からの底上げ指導の実施。	90%	・今年度においても、ゼミ毎の対応に差が生じた。 ・年々学生の成績にバラツキの差が大きかった。そのため範囲を絞り込んだ対策に苦戦した。 ・補講対象者の欠席が目立った。	国家試験の合格率 (自己採点の暫定) 発表3/31 14:00 100～98.4% (65名中/65or64名)	・ゼミ指導への意識を持たせ対策教育の改善を図る。 ・他業務との調整が厳しく、集中した対策を提供できるように改善。 ・マンパワー不足の改善。 ・欠席する原因を解明し、必要な補講ができるように改善。

### 研究活動計画

令和6年度	救急救命学科 PDCA表		PLAN (計画) の内容：研究活動の活性化		
PLAN (計画)	DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行し効果を測定する。	計画実施率 (%)	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い次へのPLANへ繋げる。
1. 学内研究助成申請と研究実施、成果の報告と論文作成 2. 外部資金の獲得 3. 学科内で研究の検討会を実施 4. 大学院進学の推奨 5. 研究日の確保と研究環境改善	1. 学内研究助成申請や研究実施に取り組む 2. 科研費応募に向けて書類作成を実施。 3. 研究検討会を実施。 4. 大学院での学業に取り組む。 5. 研究日の確保実現とタスクコントロールを実施。	65%	・教務業務が多く理想とする研究への取り組みには至れない中、昨年度より多くのエントリーがあった。	学内研究2本 外部資金6本 科研費1本	・研究の質が高まるように教育業務の改善と時間スケジュールの確保に努めたい。そのためにも業務整備と時間割整備が重要であるため、次年度は更なる業務スタイルの改善を図る。

## 救急救命学科 PDCA表

### 就職支援計画

令和5年度	救急救命学科 PDCA表		PLAN (計画) の内容：就職支援の改善、強化		
PLAN (計画)	DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行し効果を測定する。	計画実施率 (%)	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題 ／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い次へのPLAN へ繋げる。
1. 求人情報のデータを活用する。 (消防、他の公務員、病院、一般企業など) 2. 公務員試験支援 3. 消防受験のための個別指導 4. 就職支援のための教員による学生の個別支援体制の確立	1. 求人情報の集約、揭示、データベース化を実施 2. 公務員試験支援のためのカリキュラムを検討。 3. 公務員受験の小論文、面接指導を実施。 4. Plus 1 の時間を有効活用	50%	・昨年同様、就職活動計画への取り組みが遅い ・キャリア支援の環境が無いため学科内でのサポートに限界がある。	公務員希望57名中 公務員内定率 54名 (94.7%) 上記のうち 消防希望者55名 消防内定率 45名 (81.8%)	・キャリア支援の整備 ・マンパワー不足の改善 ・学生自身の就職活動計画についての意識改善指導

### 初年度 (初学者) 教育計画

令和5年度	救急救命学科 PDCA表		PLAN (計画) の内容：初学者教育の強化・改善		
PLAN (計画)	DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行し効果を測定する。	計画実施率 (%)	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題 ／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い次へのPLAN へ繋げる。
1. 学習困難者の把握 2. 資格取得の意識向上 3. 学習支援体制の強化 4. 生活環境の変化に順応する支援 (休・退学の予防に繋げる)	1. 基礎学力の把握と各学年での個別面談を実施。 2. 基礎ゼミ講義を活用し、あらゆる角度から指導。 3. Plus 1 の時間を有効活用 4. 個別面談から状況を把握し支援を行う。また、人間関係など精神的不安などの把握と対応。	65%	・人数も多いため、個々の学生をインプットするのに時間を要するためクラスコントロールに苦戦した。 ・苦戦した中でも、休退学者を最小人数で抑えられた。 ・基礎学力の対策指導計画が思うように結果に繋がれなかった。		・マンパワー不足の改善 ・基礎教育の計画の再検討 ・DXが本格化する教育体制に伴い、人間関係の構築(コミュニケーション力)にも意識した環境作りが必要。

看護学科 PDCA表

令和6年度	1年生PDCA表		PLAN (計画) の内容:			
PLAN (計画)	DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)	
P: 目標を実現するための具体的な方法を考える	D: 計画を実行しその効果を測定する。		計画実施率 (%)	C: 目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由/課題/根拠データ等	A: 課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
<p>学習状況の把握と学習支援</p> <p>①担当アドバイザーにより個人面談を実施 : 6月・10月・1月</p> <p>自己学習の状況を把握し、苦手科目の学習方法等を支援していく。学内での友達関係の把握や困っていること、学校への希望などを把握する。</p> <p>面談後、アドバイザー会議を開催し情報共有を行う。</p> <p>②学習支援センターの利用を進める。</p> <p>③国試対策の一環として、さわ研究所の教材購入講座、解剖対策コースを申し込む。 6月19日講座受講、解剖ノートをもとに夏季休暇中のノートづくりを課題として学習に取り組む。</p> <p>④メンタルケア情報(池田先生)の共有 カウンセリング面談推奨学生8名</p>	<p>①個人面談実施の結果、自己学習時間は30分から1時間が6割であった。学習の仕方が分からないとの意見もあり、苦手科目は解剖学と答えている学生が多かった。 多くの学生がアルバイトを行っており、学習時間の確保に課題が見られた。欠席回数が多い学生に対しては、個別に生活状況の確認と指導を繰り返し行った。 また、対人関係について影響を及ぼしている学生もあり、アドバイザー間で共有を行った。</p> <p>②学習支援センターの利用は、交通機関との時間の影響や利用しづらいつらいつらとの意見があり、利用は3割程度であり特定の学生に限られていた。</p> <p>③90分の講座を受講し、9割が「分かった、よくわかった」「夏休みの取り組みにする」と回答していた。教材として購入した解剖ノートの利用状況は6割であり、自主学習は学生によって差が生じた状況になった。 「人体の構造と機能」の授業が終了した2月21日に解剖ノートから100問試験を実施した。</p> <p>④カウンセリングを受けている学生について、メンタル面と共に学習に及ぼしている要因について情報共有を行った。希望のあった保護者とは、現在の学生の状況と今後についての面談を行った。</p>		100	<p>①面談からの現状把握</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業料負担をアルバイトで補っている学生については、奨学金の利用の仕方等学生支援課へ相談、保護者へ生活状況を報告し検討を図った。</li> <li>・対人関係については、SNSでの誹謗中傷など学生への聞き取りは難しい状況もある。</li> </ul> <p>・2月末の現状 休学者1名、退学者3名 理由: 対人関係、学業的問題、学校生活不適合</p> <p>②学習支援センターを利用している学生からの現状を聴取していく。</p> <p>③100問試験の結果 参加者47名/49名 平均点51点 「人体の構造と機能」科目担当教員と試験結果の共有をはかることができた。</p> <p>④学習障害の傾向について、保護者へも相談を行い、学生の能力に応じた対応が図られた。</p>	<p>学習時間状況 前期・後期履修科目の成績・単位不認定科目授業欠席状況 学習支援センター利用状況 カウンセリング対応状況</p>	<p>○アドバイザーの個人面談の継続と共有 各学生の単位取得・不認定科目の把握を行い、次年度への対応を検討する。 アルバイト等時間管理の仕方を確認し、生活指導を行う。 対人関係の悩み等個別の聞き取りを行う。 2年次へ向けて、コース選択志望や看護師資格取得の意欲の確認を行う。</p>

看護学科 PDCA表

令和6年度	2年生PDCA表		PLAN（計画）の内容：看護師教育が充実する2年次において、看護専門職を目指す看護学生として主体的に自己学習および生活習慣が調整できるよう働きかけと支援を行う。仮進級対象者には、履修登録、対応に漏れやなどが無いように指導していく。	
PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）	
ACTION（次への改善）	CHECK（評価）		ACTION（次への改善）	
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（%）	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
<p>1. 学生支援</p> <p>66名+新規留年者2名（岡林・堀）=68名            学年アドバイザー：田中（51-68+留年生計3名）            学生アドバイザー：大倉（1-17）、山田（18-25）、福田（26-32）、藤原（33-50）以上のよう            に学生を分担して支援していく</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・4-5月定例面接の実施；大倉、山田、福田、藤原、田中（コース選択の希望、選択科目を取りこぼさないように注意、悩みや不安の確認、住所や携帯番号変更の有無、1年模擬試験の結果返しなどを聞き取る）</li> <li>・臨時面接；大倉、山田、福田、藤原、田中（素行不良、欠席がちなどの情報に基づき、必要時実施する）</li> <li>・在校生オリエンテーションの実施（2年生の単位取得を見据えた内容のスライドを用いて行う：田中）</li> <li>・クラスアワーの実施（必要時）</li> <li>・mellyによる支援（必要時）</li> </ul>	<p>2024.3.6現在、退学者1名、休学者（出産含む）3名である。</p> <p>助手、助教も含めて5人体制で学生を分担し、支援を行った。</p> <p>アドバイザーは講義、実習を担当していることと、2年生の講義スケジュールも詰まっていることから、前期中の空いている時間に定例の個別面談を行った。1年次の情報の確認、困りごとなどの把握を行った。</p> <p>科目担当者からの出席率が低いこと、課題の提出状況が悪いこと、再試が不合格などさまざまな情報がアドバイザーに入ってくるため、時間外も含めて、学生と保護者への連絡、休学者への個別面談や報告書作成（保護者含む）を行った。</p> <p>4月の在校生OR時、12月クラス懇談会時にスライドを用いて学生生活、国試、就職、実習、単位取得について説明した。</p> <p>1年次のような緊急を要する案件はなかったため、クラス懇談会を兼ねたり、必要な伝達事項はMerryを用いて行った。</p> <p>必要時、各担当学生とのやりとりを随時、各教員が行っていた。学生への返答も全て対応していた。</p>	<p>100%</p>	<p>個別面談が7月実施の時もあったが、計画的に全員の日程調整を行い実施した。欠席がちな学生に対して、保護者にも連絡を行い、事務と連携して、奨学金等の指導も併せて、休学留年の対応等を行った。スポーツスカラ学生から部活動の人間関係で悩みを打ち明けられることがあった。退学した学生や欠席がちな学生の理由として、看護師になるという思いは全くなく入学してきた、1年からバイトしていたホスト、ガールズバーなどにのめりこむ学生が多い傾向がみられた。</p>	<p>前期の成績が出る時期と重なったこともあった。指導時期としては適切であったと考える。スポーツスカラ学生の情報は事務と共有した。看護師になるという思いがない学生への誘得は困難であったが、学生のみならず保護者も納得する結論に向かって対応した。</p> <p>何か問題があって臨時で面談をした場合は、その問題状況が改善したかどうかの確認が必要である。相談してきた学生の問題がその後どうなったかの確認を次年度の定例面談で行っていく。2年生は、3年生の領域実習に向けて、講義時間数も多く、学力に大きな差が出てくる時期であるため、精神面でのフォローの必要性がある。</p>

看護学科 PDCA表

<p>令和6年度</p>	<p>2年生PDCA表</p>	<p>PLAN（計画）の内容：看護師教育が充実する2年次において、看護専門職を目指す看護学生として主体的に自己学習および生活習慣が調整できるよう働きかけと支援を行う。仮進級対象者には、履修登録、対応に漏れやなどが無いように指導していく。</p>			
<p>2. 国試関連（大倉・藤原） 11月頃（未定）にさわ模試を実施</p>	<p>12月24日（火） ●模擬試験メディックメディア 低学年模試（人体の構造と機能/疾病の成り立ちと回復の促進）実施。対象62名 当日欠席者3名も後日受験し、全員受験済 ●国試対策アンケート模試自己採点入力と共に、国試対策の進捗状況・学習支援センターの活用状況・今後の希望等についてアンケートを行うこととした</p>	<p>100%</p>	<p>●模擬試験 実施時期については、疾病治療論の講義も終了し、基礎Ⅱ実習前の時期で適切であった。内容についても、メディックメディア模試は、解説本も丁寧で、自己採点をさせることで、解剖学・疾病治療論の復習にもつながりよかったと考える。 ●国試対策アンケート 学習支援センターを知っている学生が68%。うち活用したこと有りが46%、ピアサポーターの取り組みについては71%が知らないと回答。</p>	<p>ほぼ、模試結果は、全国平均並みの結果であった。自己採点をさせ、自己の点数と、アンケートを入力させることにより、自身の振り返りにもなっている。</p>	<p>領域実習・国試対策に向けても、解剖生理の基本を固めていくことが重要であると考え。3年次にも基礎模試を検討する。</p>
<p>3. 2年アドバイザー担当の授業について 護学総合演習Ⅰ（15コマ）： 山田（主）、福田（サブ）、他アドバイザー 12/20 4コマ目がダブス 1/14-15 1日中←基礎看護実習Ⅱに向けて 3/4-6 PM←領域実習に向けて</p>	<p>2024年12月24日、2025年1月14日、1月15日に看護総合演習Ⅰの計画、実施を行った。内容として、外部からマイナビ担当を招聘しての臨地実習に向けた実践的なマナー講座・基礎実習Ⅱに向けての看護過程の展開、看護技術の演習・技術チェック・評価を行った。</p>	<p>100%</p>	<p>学生からは、「実習前に演習ができてよかった」と多くの声があり、目標はほぼ達成できた</p>	<p>日程が成人式翌日とスポーツ公式試合と重なり、出欠率が悪い日程があったが、オンデマンドで対応するなどフォローを行った。</p>	<p>今年度の反省から、日程についてイベントや祭日・感染症の流行も重なるため検討を要すると考える。</p>
<p>4. クラス懇談会；福田（主）、山田（サブ）</p>	<p>12月24日に実施。出席率のことを考慮し、模擬試験後に日時を設定した。3年次を見据えた今後の学生の動きの確認をスライドにて行った。クリスマスイブだったので、学生にサンタの帽子を被ってもらい、BGMを流しながら食事会を行った。良い雰囲気であった。</p>	<p>100%</p>	<p>担当教員と担当学生が協力しながら行った</p>	<p>担当教員以外の協力を得ながら実施できた。</p>	<p>学生は「教員が行うイベント」という認識があるため、目的の説明が必要。</p>

看護学科 PDCA表

令和6年度	3年生PDCA表		PLAN（計画）の内容：		
PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（%）	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
<p>【ねらい】</p> <p>3年生は通年で領域別実習に臨む。そのため学生が全ての領域別実習へ臨めるように学習面や精神面でのサポートを行っていく。</p> <p>国家試験対策としては、領域別実習開始前かが模擬試験の実施や外部講師による解説セミナーを取り入れていく。学内模試を実施し、解説を実習グループで検討することで、知識の定着・問題の解き方や見直しの方法を身につけるだけでなく実習グループ形成、プレゼンテーション能力向上を図る。</p> <p>就職活動においては、早期から就職活動が行えるようにマイナビ講座を取り入れ、アドバイザーとしても相談を受けサポートしていく。</p>					
<p>1. 各担当アドバイザーによるサポート</p> <p>※全ての領域別実習へ臨めるように学習面や精神でのサポート ①各担当アドバイザーによる実習前の面談（4～5月） ②適宜面談の実施（必要時保護者面談）</p>	<p>4～5月：各アドバイザーによる面談の実施</p> <p>7月～3月：休学・退学・実習に伴う配慮についての保護者面談5名</p>	90	<p>4～5月に各アドバイザーにて全局面談が実施できた。実習に対する不安を抱えている学生に対しても早期の面談は良かったと考える。9月以降は、実習開始とともに実習に臨めない学生も出てきたため、適宜面談を実施した。担当アドバイザーが実習中の場合は、アドバイザー間で協力して保護者との面談を実施することができた。遠方の学生に関しては面談の調整が難しかったため、Zoom面談を取り入れタイムリーに行ったことは良かったと考える。しかし、進路変更を希望し2名が退学体調不良・妊娠・出産などの理由にて4名が休学・留年といった結果となった。</p>	<p>学生や保護者の発言や行動</p>	<p>学生状況をタイムリーに把握していくために、アドバイザー間で連携・調整して適宜面談を実施する。</p> <p>次年度は4年生になるために、それぞれのアドバイザーが担当学生に対して密に声をかけて国家試験に向けてフォローしていく。</p>

看護学科 PDCA表

令和6年度	3年生PDCA表		PLAN (計画) の内容 :		
PLAN (計画)	DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)
<p>2. 国家試験対策</p> <p>①業者模試 (東京アカデミー) の実施と解説セミナー</p> <p>②学内模擬試験130問 : 人体の構造と機能・疾病 + 基礎看護</p>	<p>令和6年5月7日 : 業者模試の実施 (東京アカデミー)</p> <p>5月21日 : 解説セミナー</p> <p>令和6年7月8日~18日</p> <p>学内模擬試験130問の実施</p> <p>内容 : 人体の構造と機能・疾病 + 基礎看護</p> <p>各自見直し後、実習グループにて解説を作りプレゼン発表</p>	100	<p>実習開始前 (5月) に業者模試・外部講師による解説セミナーを実施したことは、学生の国家試験に対する意識の向上と、実習に向けての意識が向上し良かったと考える。外部講師によるセミナーも理解しやすい内容であったと考える。</p> <p>7月に実施した学内模試130問については、1回目模擬試験実施後、各自とグループでの見直し後に解説を考えプレゼンを行った。結果学生の平均点が2週間の間で向上していること、学生アンケート結果がで</p> <p>「大変良かった」、「よかった」が89%を占め、学びに繋がった体験を得ていたこともあり、今回の取り組みは効果があったと考える。「自分自身の苦手分野を理解」「自分で解説することで知識も深まり、他のグループの発表を聞くことで今まで理解していなかったことも理解できた」など、学びに繋がった意見が多かった。また実習グループで行ったことも、実習に向けての取り組みとしては良かった。ただ「もっと問題を多く解きたかった」との意見もあり、内容等については検討が必要である。</p>	学生アンケート結果	<p>今年度学内模試の見直し・解説を実習グループにて検討した点は良かったと考える。しかし、教室の確保ができず、複数の教室にておこなった為、指導側の人手が不足してしまった。今後は計画的に、使用教室の確保や教員の確保など検討が事前に必要である。</p>
<p>3. 就職にむけての活動</p> <p>マイナビ講座 (出張講座)</p>	<p>令和6年7月 : 就職活動にむけて</p> <p>令和6年12月 : 就職試験に向けて願書の書き方面接の仕方など</p>	100	<p>今年度、7月にマイナビ講座を開催して頂き、早期に就職活動に取り組むことができた。夏季休暇中にもインターンシップへ行くなど、早期より就職先の選定に向けて臨むことが出来た。また12月の就職試験に向けての講座に関しても、積極的に受講できて今後に向けてとても生かせる内容であったと考える。</p>	学生の発言や行動	<p>今後も学生の实習や講義の時期に合わせて、早期の就職活動を実施していくために、マイナビ講座を取り入れていく。</p>
<p>4. クラスアワー (1回) クラス委員中心に1回/年実施する</p>	<p>令和7年3月19日1限に実施予定</p>	100	<p>3年生は領域別実習が年間あり、クラスアワーの時間の確保が困難であった。今年度は3月に実施することで、実習を頑張った友人との交流の機会になると考える。しかし、100%の参加には至らなかった。</p>	学生の参加率と反応	<p>実習が年間あった為、クラスアワーの時間の確保が困難であったが、出来るだけ全員が参加出来るようなしくみが必要である</p>

学年	令和6年度	PDCA表		PLAN（計画）の内容：		
	PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
	P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D：計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（%）	C：目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A：課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
全体	最終学年として、 1)自ら学習する姿勢を身につけ、国家試験に全員で合格できるように支援する。 2)なりたい看護職をイメージし、本人にあった就職ができるように支援する。	1)4月ガイダンスで動機づけ 国家試験対策をスケジュールにそって実施 解剖生理の学習、問題配付等追加 個別面談を丁寧に繰り返し、サポート 2)就職の履歴書作成、面接練習を随時アドバイザーで実施した。	100	1)国家試験対策は下記の通り 自己採点時点において合格率100%達成できず 2)就職支援は4年生から開始したが、就職試験の前倒しに合わせて、就活準備として3年生夏から意識したほうが良かった。（大学時代に力を入れて取り組んだことに、何も記入できないなど散見した）	1)模擬試験データ等 2)就職率75名/76名内定 (1名は進学希望からの進路変更のため現在就活中)	1)継続実施 2)就職準備講座は3年生夏に実施 全体的にキャリア支援の計画を前倒しにした
国試対策4年	看護師国家試験模擬試験を実施 ①全国平均と本学成績の比較データを作成する。 ②手作り模試1回+業者模試5回（東京アカデミー3回、メディックメディア2回）合計6回実施する。	①すべての模擬試験において、全国平均と本学平均を比較検討した。また、各学生の個人成績および自己採点結果と、看護師国家試験模擬試験結果（業者データ）を一覧にし、一括して学生の成績推移を把握し、学生指導に役立てた。 ②計画していたすべての模擬試験に加え、必修100問の手作り模試を夏休み前に実施した。	100	・計画を実施したことで、模擬試験結果の全国平均と本学平均の比較した結果、11月、12月、1月は全国平均を上回った。	模擬試験結果データを一括管理したことや、計画通りに模擬試験を実施したことは受験対策にお有効であった。	継続的に続けることが必要である。
国試対策4年	予備校外部講師の導入 ①経済的理由のため、受験対策として予備校に通えない学生がいるため、全学生に対して予備校講師による講義を大学で保証する。 ②東京アカデミー外部講師による苦手分野克服講座を導入 ③東京アカデミー国家試験模試をするたびに、模擬試験解説講座を実施する。 ④総合Ⅲの時間割枠を活用するため、国試対策委員会での必要性を共有する	・東京アカデミー外部講師による苦手克服講座を3日間・各3コマ開催した。また東京アカデミー模試を3回実施し、後日模試解説を実施した。総合Ⅲの時間割とは別に組み立てた。	100	・苦手克服講座、模試解説ともに、テキストに沿い、講師陣の講義内容は理解しやすいと意見が多かったが、特定の学生に欠席が見られた。	・受講後学生アンケート ・模擬試験結果が全国平均を上回った	継続的に続けることが必要である。 欠席者対策が必要である。
国試対策会計	会計 ①公正で有効な予算立案 ②看護学部予算金・教育振興会補助金・学生負担金などに基づいた出納管理 ③会計監査の受審	①②学部予算 1,200,000円⇒支出 1,194,520円 [1年生：30,000円 2年生：0円 3年生：30,000円 4年生（看護）：960,000円 保健：69,800円 助産：30,000円 雑費：74,720円] ③2/26 大倉先生による会計監査を受審した。	100	看護学部予算1,200,000円に加え、教育振興会補助金、同窓会なごみ会支援金、学生負担金も合わせ、計画通りの執行をすることができた。	会計報告書	・今年度同様の予算を確保する。 ・次年度、セミナー開催の時期変更による予算軽減を有効に活用する。

国試対策4年	学生の自己管理を促す仕組みを継続 ①「第114回 看護師国家試験 合格への道 2024年度 私の学習成果記録」を作成する。 ②看護師国家試験模擬試験実施後は、必ず自己採点を実施する。学生自らが配点を把握することで、問題への取り組み意識を養う。また、業者採点と自己採点が同一であることを目指す。	①「第114回 看護師国家試験 合格への道 2024年度 私の学習成果記録」を作成し、4月に配付した。 ②看護師国家試験模擬試験後は、自己採点を実施し、各自Google formへ入力を行った。当初入力方法の間違いや業者採点との乖離も見られたが回を重ねるごとに修正できた。 ③④毎回、模擬試験後に個別面談（対面、リ	100	①「第114回 看護師国家試験 合格への道 2024年度 私の学習成果記録」の作成は自己管理及び面談時に役だったが、全員が十分活用したとは言えなかった。 ②③④看護師国家試験模擬試験後は、Google formに自己採点結果を入力することにより、学生自身も自分の結果に向き合うことができた。また、教員もタイムリーに点数を把握する	合格の道活用状況は全員分は未確認 自己採点の入力は100%	毎回模擬試験の後に、個別面談にて苦手分野などを学生と共有し、次回の模擬試験の目標を立て、計画的に学習するように意識づける必要がある。そのためタイムリーに自己採点結果が得られることや、合格の道の活用を継続することが必要である。
--------	--	---	-----	---	----------------------------------	--

	<p>③学生自ら自分の苦手問題の傾向と対策を考える。</p> <p>④教員による学生面談で使用し、指導に役立てる。</p>	<p>モート)にて成績を学生と共有し、次回の模擬試験の目標を立て、計画的に学習するように促がした。</p>		<p>ことができ学生面談に役立てることができた。</p>																
国試対策4年	<p>成績低迷者対策</p> <p>①業者のセミナー及びクラスの利用促進 業者のレベル別クラスの受講及び各講習などによる学習力強化の促進強化</p> <p>②定期的面談による学習状況の把握と指導</p> <p>③成績優秀者を含めた学生同士での情報交換</p> <p>④プラスワンの有効活用 プラスワンを利用した直接指導 DVDを計画的に視聴</p>	<p>模擬試験の点数が必修35点以下、一般状況150点以下の学生に加え、アドバイザーが気になる学生も支援対象とした。また、一緒に勉強できる友人がいるかも確認した。</p> <p>①3年生までの成績が低迷している学生には、4月時点で業者の講習受講を促がした。 ・模擬試験の点数が伸び悩んだ学生についても、随時面談を実施し、必要時保護者へ連絡、業者の講習受講等支援を依頼した。</p> <p>②夏休み前に夏休みの勉強計画を提出させ、夏休み中にリモート等で進捗状況を確認した。 ・模擬試験後に個別面談(対面、リモート)を実施し、成績を学生と共有し、次回の模擬試験の目標を立て、計画的に学習するように促がした。(11月模擬試験までは全員実施) 希望者に必修問題など配付した。</p> <p>③学修支援センターのピアサポーター制度を活用するように指導した。</p> <p>④4月に解剖生理の問題を配付し、プラスワンや、土曜日(リモート)にて勉強会を開催した。</p>	100	<p>成績低迷者が減少 4月57名⇒1月0名</p> <table border="1"> <tr> <td></td> <td>4月</td> <td>7月</td> <td>9月</td> <td>11月</td> <td>12月</td> <td>1月</td> </tr> <tr> <td>成績低迷者</td> <td>57</td> <td>42</td> <td>19</td> <td>14</td> <td>4</td> <td>0</td> </tr> </table>		4月	7月	9月	11月	12月	1月	成績低迷者	57	42	19	14	4	0	<p>前半は全員に対し模擬試験後に個別面談を実施し、国家試験受験へのサポートを行い、後半は学生に合わせてサポートを行った。模擬試験結果に反映したと考える。</p> <p>また、7月から9月に減少しており、夏休みの勉強計画の立案および進捗状況の声掛けが効果的であったと考える。</p>	<p>継続的に続けることが必要である。</p>
	4月	7月	9月	11月	12月	1月														
成績低迷者	57	42	19	14	4	0														
国試対策4年	<p>総合Ⅱ：各領域100問試験を行う</p> <p>総合Ⅲ：各領域で正答率の低い問題に特化して解説を行う</p> <p>時期については要調整</p>	<p>・総合Ⅱは後期前半、総合Ⅲは後期後半で開講 総合Ⅱは各領域ごとに必修、一般・状況設定を組み合わせ100点になるよう出題 講義日程は、模擬試験や苦手克服講座の日程確保を優先したため、期日指定の開講となり、連日試験という日程もあった。</p> <p>・総合Ⅲは総合Ⅱの正答率の低い問題を中心に、試験実施や解説など各講師により理解が深まるよう授業形態を工夫</p> <p>総合Ⅲは全員履修を呼びかけたが67名の履修登録(自分の計画で勉強したい等)であった。</p>	100	<p>・総合演習Ⅱは、定期的の開講できる方が試験対策として取り組みやすいと考える。また、再試・追試など複数回になり、日程確保で各領域講師に手間がかかった。</p> <p>・模擬試験で点数が取れていても、総合Ⅱで複数の領域が再試対象となる学生もおり、学習レベル判断の参考になった。</p>	総合Ⅱ・Ⅲ成績	<p>継続的に続けることが必要である。</p> <p>できるだけ早い時期に全体の講義日程が示せるほうが試験勉強を計画的に進めることができるかと考える。</p>														

学年	令和6年度	国試対策委員会PDCA表		PLAN（計画）の内容：		
	PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
	P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D：計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（％）	C：目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A：課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
1年	<b>学生が学習方法を身につけるための対策</b> さわ研究所の教材購入特典講座より、解剖対策コースを申し込み、ノートづくりの方法を学ぶ。6月19日講座（90分）を受講 ①「人体の構造と機能Ⅰ」授業内容の復習につなげていく。 ②夏季休暇中のノートづくりを課題とする。 ③講座・教材の利用について学生アンケートを実施する	解剖ノートの教材特典講座を申し込み、循環器の講義を受講した。 学生への受講後のアンケートでは、8割は「良かった・よくかった」「夏休みの取り組みにする」と回答を得ていた。 夏季休暇中の自主学習としては、教材を利用して書き込みを行いノートづくりをしていた学生もあったが、自主学習には及ばず各学生によって差が生じた状況になった。	70%	さわ研究所の教材購入特典講座の利用は、学生アンケートからも学習理解を促し有効であった。しかし、自習学習に至っては、ノートづくりの提出を行うなど、期限や形に現れる対策が必要であった。		国家試験対策として、低学年模試・対策講座等の計画を行う。
	<b>自己学習状況の把握</b> ①年3回個人面談：6月・10月・1月に各担当のアドバイザーが個人面談を実施する。 自己学習の状況を把握し、苦手科目の学習方法を支援していく。	・各教員が個人面談を実施する中で、学習状況を把握した。テスト・課題に追われて全体的に自主学習の時間は少ない状況にあった。 ・人体の構造と機能の授業が終了を考慮して、2月21日に、解剖ノートから100問試験を実施した。	100	解剖ノート100問試験の実施については、事前の参加意欲は低かったが、人体の構造と機能の授業担当教員からも試験への参加を促して頂き、93%が受験に至った。 その場で自己採点を行った。	参加者：46名/48名 最高点94点 最低点27点	アドバイザーにより、継続して個人面談を実施 苦手科目となる教員との状況共有

学 年	令和6年度	国試対策委員会PDCA表		PLAN（計画）の内容：		
	PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
	P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D：計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（%）	C：目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A：課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
2 年	2年次の目標は、疾病治療論等の単位取得に主眼を置き、主体的に自己学習の習慣を確立することとしている。今年度は解剖生理と疾病治療の理解を強化するため、12月に看護師国試模試を行う。→12月23日（月）実施予定 メディックメディア 低学年模試（人体の構造と機能/疾病の成り立ちと回復の促進）	12月24日（火） ●模擬試験 メディックメディア 低学年模試（人体の構造と機能/疾病の成り立ちと回復の促進）実施 対象62名 当日欠席者3名も後日受験し 全員受験済 ●国試対策アンケート 模試自己採点入力と共に、国試対策の進捗状況・学習支援センターの活用状況・今後の希望等についてアンケートを行うこととした。	100%	●模擬試験 実施時期については、疾病治療論の講義も終了し、基礎II実習前の時期で適切であった。 内容についても、メディックメディア模試は、解説本も丁寧で、自己採点をさせることで、解剖学・疾病治療論の復習にもつながりよかったと考える。 ●国試対策アンケート 学習支援センターを知っている学生が68%。うち活用したこと有りが46%、ピアサポーターの取り組みについては71%が知らないと回答。	ほぼ、模試結果は、全国平均並みの結果であった。自己採点をさせ、自己の点数と、アンケートを入力させることにより、自身の振り返りにもなっている。	・学習支援センターに関する情報提供、効果的な活用の促進に向けた取り組みを国試対策委員会で検討する必要がある。

学 年	令和6年度	国試対策委員会PDCA表		PLAN (計画) の内容：		
	PLAN (計画)	DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)
	P: 目標を実現するための具体的な方法を考える	D: 計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率 (%)	C: 目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由/課題/根拠データ等	A: 課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
3 年	<p>国試対策が臨地実習での学修に、有効に効果を発揮することを目的とし、下記の取り組みを行う。</p> <p>ねらい：領域実習に必要な知識の定着を図り、国家試験対策とする。実習グループ形成を促すとともに、学生個々のプレゼンテーション能力の向上と知識の定着を図る</p> <p>科目：人体の構造と機能（加齢に伴う生体機能の変化を含む）+基礎看護</p> <p>1. 5月7日東京アカデミー専門基礎模試 東アカフレンド登録</p> <p>2. 5月21日東京アカデミー解説講座：3限-4限</p> <p>3. 7月8日～18日</p> <p>①130問テスト実施</p> <p>②自己採点を行い各自見直しを行う。</p> <p>③130問テストの解説をグループで行う</p> <p>④130問テストをグループ割り当て、プレゼンテーション内容の原稿を作成する→教員確認</p> <p>⑤学生による発表</p> <p>⑥力試し130問テスト実施</p> <p>4. 学生負担金の軽減を図る</p> <p>①模試代金1300円+セミナー代700=2000円 学生一人あたり2000円</p> <p>③東京アカデミー解説セミナー 51000×2コマ=102000円 (内訳)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>看護学部補助金30000円</li> <li>なごみ会補助金一人481円×61名分=29341円</li> <li>セミナー代金700円×61=42700円</li> </ul>	<p>計画どおりを実行した。その効果を測定するため、以下の取り組みを行った。</p> <p>1) 130問テストを2回実施（1回目より2回目では、テスト内容の困難度を高く設定）、平均点を比較した。</p> <p>2) 学生アンケートを実施した。</p> <p>1) 130問テスト結果</p> <p>1回目 7月9日130問テスト点数（難易度：低い） 平均点数：47 最高90 最低23</p> <p>2回目 7月19日130問テスト点数（難易度：高い） 平均53.6 最高76 最低39</p> <p>2) 学生アンケート結果（50件回答）</p> <p>①左記の取り組みについて 学生からは「とてもよかった」（15%）、「よかった」（74%）、「あまりよくなかった」（8%）、「よくなかった」（3%）の結果を得た。自由記述で「とてもよかった」、「よかった」と答えた人は、「自分自身の苦手分野を理解」「自分で解説することで知識も深まり、他のグループの発表を聞くことで今まで理解していなかったことも理解できた」など、学びに繋がった意見が多かった。「あまりよくなかった」と答えた人の理由は、「お金と時間がかかったから、もっと問題を多く解きたかった」「段取りが悪い、 unnecessary 時間が多い」「実習がある年で集中出来なかった」であった。</p> <p>②ねらいの達成について（複数回答）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「パワーポイントのプレゼンが学べた」（56%）</li> <li>「友だちの解説を聞いて刺激を感じた」（40%）</li> <li>「実習グループの友達と仲良くなった」（40%）</li> <li>「チームナーシングの大切さを実感した」（36%）</li> <li>「パソコンが上達した」（30%）</li> <li>「科目の苦手が克服できた」（18%）</li> <li>「実習に活かせると思った」（26%）</li> <li>「自分に自信がもてた」（6%）の結果であった。</li> </ul>	100	<p>当初の計画通り、実施した。学生の平均点が2週間の間で向上していること、学生アンケート結果がで「大変良かった」、「よかった」が89%を占め、学びに繋がった体験を得ていたこともあり、今回の取り組みは効果があったと考える。「あまりよくなかった」、「よくなかった」と答えた学生の理由から、段取りの悪さ（教室のブッキング、座席指定されていない、時間配分）を指摘する声があったことから、次年度に向けては改善が必要である。</p> <p>段取りが悪いとの指摘について、4年生の総合・統合実習の裏時間を活用したため、指導教員の確保、教室の確保が十分でなかった。そのため、指導教員は常時3名は確保し（今年度は2名体制が多く、3名体制ではなかった）、教室の確保をするとともに座席を決めておく必要がある（今年度は急な教室の変更もあり、座席固定が難しかった）。</p> <p>臨地実習前の取組みであることを意識し、「ねらい」として、知識の定着、実習グループ形成、プレゼンテーション能力向上を掲げたが、概ね達成できたものとする。次年度、さらに達成できるよう、取り組みを継続させる必要があると考える。</p>	<p>学生アンケート結果 100問テスト、100問テスト力試しの平均点の差</p>	<p>・統合・総合実習の裏時間で3年生の国試対策を継続して取り組む必要がある。</p> <p>・3年生の実習開始時に合わせ、学習する時間を確保したことは、学生の学びの場となり、実習にも活かすことができた。そのため、国試対策として継続的に取り組む必要がある。取り組む場合の改善すべき課題は、下記の3点である。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・指導教員数の確保（最低3名）</li> <li>・教室確保と座席指定</li> <li>・時間配分の見直し</li> </ul>

学年	令和6年度	国試対策委員会PDCA表		PLAN（計画）の内容：		
	PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
	P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（%）	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
全体	年間スケジュール及び全体の見える化の継続 ①昨年度作成した1年生から4年生まで全体のスケジュールのエクセルシートに今年度のデータを追加して比較検討し、経年経過が把握できるようにする。	年間スケジュールの見える化を図った。 ①1年生から4年生、既卒生について、年間スケジュールを作成し、全体の見える化を実施した。前期、後期で随時訂正し、次年度に向けて経過と効果がわかるように記録した。 ②チームス「2023年～国試対策委員会」に国試対策に関わるすべてのデータをアップし、国試対策委員全員が情報共有し、活用できるようにした。 ③チームス既卒生「チャレンジチーム」の立ち上げを行い、原則毎月1回以上、国試情報（予想問題、業者情報、受験に関する情報など）を提供した。 ④4年生配付文書（ア.成績低迷者保護者宛文書、イ.国試後の対応文書）のひな形を作成した。	100	①全体のスケジュールを網羅して管理運営することができた。これにより、継続的に国試対策計画の立案が容易になったと考える。成績低迷者の学生対応については、個別対応となるため、詳細記述は難しく、プロセス評価することが必要と思われる。 ②チームス内に1年生～4年生までの取組み情報がわかるようにフォルダを作成した。担当者の変更があっても、国試対策の経過がわかるように可視化した。 ③既卒生「チャレンジチーム」の立ち上げは、年度が開始されてからとなった。そのため、学生への周知が十分でなかったことで、6名中2名の参加が見られなかった。そのため、 ④イ.国試後の対応文書に盛り込み、現役のうちに周知するようにした。	チームスの活用継続 プロセス評価の必要性	・国試対策のスケジュールの見える化については継続的に取り組む必要がある。 ・チームスのさらなる活用を検討する。各学年の取り組みデータをアップし、年間スケジュールと対比させて評価していく必要がある。 ・プロセス評価について、学生に対してアンケートを実施し、経年的に比較するなどの対策が必要である。
国対会計	会計 ①公正で有効な予算立案 ②看護学部予算金・教育振興会補助金・学生負担金などに基づいた出納管理 ③会計監査の受審	①②学部予算 1,200,000円⇒支出 1,194,520円 [1年生：30,000円 2年生：0円 3年生：30,000円 4年生（看護）：960,000円円 保健：69,800円 助産：30,000円 雑費：74,720円] ③2/26 大倉先生による会計監査を受審した。	100	看護学部予算1,200,000円に加え、教育振興会補助金、同窓会なごみ会支援金、学生負担金も合わせ、計画通りの執行をすることができた。	別紙会計報告書参照	・今年度同様の予算を確保する。 ・次年度、セミナー開催の時期変更による予算軽減を有効に活用する。
4年	看護師国家試験模擬試験を実施 ①全国平均と本学成績の比較データを作成する。 ②手作り模試1回+業者模試5回（東京アカデミー3回、メディックメディア2回）合計6回実施する。	①すべての模擬試験において、全国平均と本学平均を比較検討した。また、各学生の個人成績および自己採点結果と、看護師国家試験模擬試験結果（業者データ）を一覧にし、一括して学生の成績推移を把握し、学生指導に役立てた。 ②計画していたすべての模擬試験に加え、必修100問の手作り模試を夏休み前に実施した。	100	・計画を実施したことで、模擬試験結果の全国平均と本学平均の比較した結果、11月、12月、1月は全国平均を上回った。	模擬試験結果データを一括管理したことや、計画通りに模擬試験を実施したことは受験対策にお有効であった。	継続的に続けることが必要である。
4年	予備校外部講師の導入 ①経済的理由のため、受験対策として予備校に通えない学生がいるため、全学生に対して予備校講師による講義を大学で保証する。 ②東京アカデミー外部講師による苦手分野克服講座を導入 ③東京アカデミー国家試験模試をするたびに、模擬試験解説講座を実施する。	・東京アカデミー外部講師による苦手克服講座を3日間・各3コマ開催した。また東京アカデミー模試を3回実施し、後日模試解説を実施した。総合Ⅲの時間枠とは別に組み立てた。	100	・苦手克服講座、模試解説ともに、テキストに沿い、講師陣の講義内容は理解しやすいと意見が多かったが、特定の学生に欠席が見られた。	・受講後学生アンケート ・模擬試験結果が全国平均を上回った	継続的に続けることが必要である。 欠席者対策が必要である。

	④総合Ⅲの時間割枠を活用するため、国試対策委員会で必要性を共有する																			
4年	<p>学生の自己管理を促す仕組みを継続</p> <p>①「第114回 看護師国家試験 合格への道 2024年度 私の学習成果記録」を作成する。</p> <p>②看護師国家試験模擬試験実施後は、必ず自己採点を実施する。学生自らが配点を把握することで、問題への取り組み意識を養う。また、業者採点と自己採点が同一であることを目指す。</p> <p>③学生自ら自分の苦手問題の傾向と対策を考える。</p> <p>④教員による学生面談で使用し、指導に役立てる。</p>	<p>①「第114回 看護師国家試験 合格への道 2024年度 私の学習成果記録」を作成し、4月に配付した。</p> <p>②看護師国家試験模擬試験後は、自己採点を実施し、各自Google formへ入力を行った。当初入力方法の間違いや業者採点との乖離も見られたが回を重ねるごとに修正できた。</p> <p>③④毎回、模擬試験後に個別面談（対面、リモート）にて成績を学生と共有し、次回の模擬試験の目標を立て、計画的に学習するように促がした。</p>	100	<p>①「第114回 看護師国家試験 合格への道 2024年度 私の学習成果記録」の作成は自己管理及び面談時に役だったが、全員が十分活用したとは言えなかった。</p> <p>②③④看護師国家試験模擬試験後は、Google formに自己採点結果を入力することにより、学生自身も自分の結果に向き合うことができた。また、教員もタイムリーに点数を把握することができ学生面談に役立てることができた。</p>	<p>合格の道活用状況は全員分は未確認</p> <p>自己採点の入力は100%</p>	<p>毎回模擬試験の後に、個別面談にて苦手分野などを学生と共有し、次回の模擬試験の目標を立て、計画的に学習するように意識づけることが必要である。そのためタイムリーに自己採点結果が得られることや、合格の道の活用を継続することが必要である。</p>														
4年	<p>成績低迷者対策</p> <p>①業者のセミナー及びクラスの利用促進 業者のレベル別クラスの受講及び各講習などによる学習力強化の促進強化</p> <p>②定期的面談による学習状況の把握と指導</p> <p>③成績優秀者を含めた学生同士での情報交換</p> <p>④プラスワンの有効活用 プラスワンを利用した直接指導 DVDを計画的に視聴</p>	<p>模擬試験の点数が必修35点以下、一般状況150点以下の学生に加え、アドバイザーが気になる学生も支援対象とした。また、一緒に勉強できる友人がいるかも確認した。</p> <p>①3年生までの成績が低迷している学生には、4月時点で業者の講習受講を促がした。 ・模擬試験の点数が伸び悩んだ学生についても、随時面談を実施し、必要時保護者へ連絡、業者の講習受講等支援を依頼した。</p> <p>②夏休み前に夏休みの勉強計画を提出させ、夏休み中にリモート等で進捗状況を確認した。 ・模擬試験後に個別面談（対面、リモート）を実施し、成績を学生と共有し、次回の模擬試験の目標を立て、計画的に学習するように促がした。（11月模擬試験までは全員実施） 希望者に必修問題など配付した。</p> <p>③学修支援センターのピアサポーター制度を活用するように指導した。</p> <p>④4月に解剖生理の問題を配付し、プラスワンや、土曜日（リモート）にて勉強会を開催し</p>	100	<p>成績低迷者が減少 4月57名→1月0名</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>4月</th> <th>7月</th> <th>9月</th> <th>11月</th> <th>12月</th> <th>1月</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>成績低迷者</td> <td>57</td> <td>42</td> <td>19</td> <td>14</td> <td>4</td> <td>0</td> </tr> </tbody> </table>		4月	7月	9月	11月	12月	1月	成績低迷者	57	42	19	14	4	0	<p>前半は全員に対し模擬試験後に個別面談を実施し、国家試験受験へのサポートを行い、後半は学生に合わせてサポートを行った。模擬試験結果に反映したと考える。</p> <p>また、7月から9月に減少しており、夏休みの勉強計画の立案および進捗状況の声掛けが効果的であったと考える。</p>	<p>継続的に続けることが必要である。</p>
	4月	7月	9月	11月	12月	1月														
成績低迷者	57	42	19	14	4	0														
4年	<p>総合Ⅱ：各領域100問試験を行う</p> <p>総合Ⅲ：各領域で正答率の低い問題に特化して解説を行う</p> <p>時期については要調整</p>	<p>・総合Ⅱは後期前半、総合Ⅲは後期後半で開講</p> <p>総合Ⅱは各領域ごとに必修、一般・状況設定を組み合わせ100点になるよう出題</p> <p>講義日程は、模擬試験や苦手克服講座の日程確保を優先したため、期日指定の開講となり、連日試験という日程もあった。</p> <p>・総合Ⅲは総合Ⅱの正答率の低い問題を中心に、試験実施や解説など各講師により理解が深まるよう授業形態を工夫</p> <p>総合Ⅲは全員履修を呼びかけたが67名の履修登録（自分の計画で勉強したい等）であった。</p>	100	<p>・総合演習Ⅱは、定期的の開講できる方が試験対策として取り組みやすいと考える。また、再試・追試など複数回になり、日程確保で各領域講師に手間がかかった。</p> <p>・模擬試験で点数が取れていても、総合Ⅱで複数の領域が再試対象となる学生もおり、学習レベル判断の参考になった。</p>	<p>総合Ⅱ・Ⅲ成績</p>	<p>継続的に続けることが必要である。</p> <p>できるだけ早い時期に全体の講義日程が示せるほうが試験勉強を計画的に進めることができると考える。</p>														

学年	令和6年度	PLAN (計画) の内容 :				
	PLAN (計画)	DO (実行)	CHECK (評価)		ACTION (次への改善)	
	P: 目標を実現するための具体的な方法を考える	D: 計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率 (%)	C: 目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由/課題/根拠データ等	A: 課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
助産コース	<p>・国家試験受験前(第3回模試)の総合評価「A」を目指す。</p> <p>・全国統一模擬試験「さんもし」を実施し、学生個々の課題に対する指導をする。</p>	<p>①「さんもし」の早期申込み割引を利用し、学生の費用負担を軽減させる。</p> <p>②第1回「さんもし」 5月22日実施予定。 : 実力把握と課題分析・指導</p> <p>③第2回「さんもし」 12月実施予定 : 実力アップの確認と課題分析・指導</p> <p>④第3回「さんもし」12月～1月に実施予定。 : A評価の確認と心構え指導</p> <p>⑤必要時他の模試の案内や手作り模試を考慮する。</p>	100%	<p>①学生の費用負担を軽減できた。</p> <p>②③④計画通り実施した。結果、3回の模擬試験を通して、実力アップが確認できた。</p> <p>⑤過去問や予想問題のコピーの提供も効果的であった。</p>	<p>①学生負担は¥3400/人。通常申込みと比較し¥300の軽減。</p> <p>②③④⑤学生毎の総合評価の判定結果の推移 D→A→A D→A→A E→C→A D→A→A * 2/13に実施された助産師国家試験結果の自己採点において、全員合格ラインクリア</p>	<p>支援内容は適切であったか、学生にアンケートにより評価を受けた。</p> <p>模試の実施・面談・過去問や参考図書の提供・難解問題の解説など、継続する。</p>

学年	令和6年度	国試対策委員会PDCA表		PLAN（計画）の内容：		
	PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
	P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（%）	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
保健師	<p>①6月～7月 第110回 保健師国試 過去問の受験を実施する。問題の解説授業を実施して、弱点を重点的に学習し、今後の各自の学習計画を考えてもらう。 →個別面談の実施</p> <p>②10月 インターメディカル 第1回 ほけもしを受験する。得点率60%以上を目指す。 →個別面談の実施</p> <p>③11月 東京アカデミー全国模試を受験し、得点率60%以上を目指す。 →個別面談の実施</p> <p>④東京アカデミーによる模試後解説セミナーを受講し、学生の理解不足の内容を補い、継続した学習への意欲を向上させる。</p> <p>⑤11月 インターメディカル第2回ほけもしを受験し、得点率60%以上を目指す。 →個別面談の実施</p> <p>⑥12月 インターメディカル第3回ほけもしを受験する。得点率60%以上を目指す。 →個別面談の実施</p> <p>⑦1月 東京アカデミー全国模試（昨年版）を実施する。得点率60%以上を目指す。 →個別面談</p>	<p>① 7月 実習後に全員実施。得点率60%に到達した学生<b>4名/14名</b>→全員個別面談（看護師模試の結果も踏まえて、保健師国試ダブル合格に向けた学習計画の確認と指導）</p> <p>② 10月ほけもし受験し、得点率60%に到達した学生<b>9名/14名</b>→全員個別面談の実施</p> <p>③ 全員東アカ模試を受験し、得点率60%に到達した学生<b>5名/14名</b>→全員個別面談の実施</p> <p>④ 全員セミナーを受講し、苦手分野疫学統計について理解を深める。</p> <p>⑤ ほけもしを受験し、得点率60%に到達した学生<b>8名/14名</b>→全員個別面談の実施（看護師国試勉強との時間配分などの指導） →疫学保健統計動画学習会の開催。</p> <p>⑥ ほけもしを受験し、得点率60%に到達した学生<b>10名/14名</b>→全員個別面談の実施（保健師国試を主軸に勉強時間の確保） →全員年末年始課題としてほけもし過去問・解説書（3回分）配布</p> <p>⑦ 東アカ昨年模試を受験し、得点率60%に到達した学生<b>12名/14名</b>→全員個別面談の実施（夜型から朝型への切り替え） →保健師コース自主学習会の実施（1/20～1/31）過去5年過去問配布</p>	<p>① 100%実施</p> <p>② 100%実施</p> <p>③ 100%実施</p> <p>④ 100%実施</p> <p>⑤ 100%実施</p> <p>⑥ 100%実施</p> <p>⑦ 100%実施</p>	<p>保健師模試を重ねるごとに合格点に達する学生の人数が増加し、同時に看護師模試の得点も早い段階から合格点に達していた学生が多かった。 今年度も、3回のほけもしの復習を中心に指導を進め、年末年始にかけて、更に追加で、昨年度のほけもし3回分の過去問と解説書を自己採点も含めて、復習する課題を出した。 さらに、従来行っていなかった国試直前模試（東アカ昨年模試）を行った。年末年始の頑張りの成果が明らかとなり、頑張った学生12名は、1月の東アカ過去問で合格点に達していた。</p> <p>12月のほけもし・1月の東アカ昨年模試の結果が動機づけとなり、自主学習会への参加に繋がり、グループで国試直前まで大学で勉強する姿が見られたことは、非常に効果的であった。 成績優秀な学生にリードを依頼した上で、スタートしたが、参加している学生の表情が、明るく前向きになり、苦手な疫学保健統計について、白板を活用して勉強会をしたり、状況設定問題の見解について、意見交換をおこなう等、国試合格につながる取り組みになったと言える。</p> <p>結果、111回保健師国試合格予想において合格ラインに到達していない1名（1点不足）は、途中合格ラインに達していたものの、ほぼグループ学習会に参加せず、一人で東京アカデミーもしくは自宅学習をしていた。</p>	<p>データ：保健師模試結果一覧表の推移より。 本番の保健師国試の速報結果による自己採点においては、14名中13名は60%以上（87点以上）で合格が見込まれる予想となっている。1名は59%（86点）であり、合格ラインに達していない。</p> <p>保健師コース学生の中で保健師国試対策学習への取り組み時間の個人差が大きく、一律には進められず、個別の対応をしつつ、看護師模試結果と合わせて学習時間の配分、方法を個別に提案する必要がある。 特に、総合演習Ⅱの100問問題等で、看護師国試が中心になり保健師国試に集中できない期間がある。その間は、保健師コース講義の中で、国試対策を意識した取り組みが必要と考えている。さらに、GPAが低い学生は早期から、東京アカデミーのセミナー受講を勧奨する等、個別対策が必要である。 また、保健師コースの学生は、年内に看護師を固め、国試直前の追い込みが重要となり、今後も、学生のモチベーション維持向上を図りながら、「国試直前グループ学習会」の設定が、効果的ではないかと考えている。</p>	

看護学科 PDCA表

令和6年度	(教務委員会)PDCA表		PLAN (計画) の内容:		
PLAN (計画)	DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)
P: 目標を実現するための具体的な方法を考える	D: 計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率 (%)	C: 目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由/課題/根拠データ等	A: 課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
1. 時間割の確認及び調整 2. 教育日程の確認等	1. 時間割の確認及び調整 ①後期時間割作成と調整 ②実習ローテーションとの調整 ③研究方法論の履修に関する調整 ④卒業研究の時期及び担当者の調整 ⑤科目担当講師との調整 ⑥講師調整 2. 教育日程の確認等 ①3年生領域実習開始日、オリエンテーション日 ②看護総合・統合実習 ③人々の生活を知る実習 ④基礎看護学実習Ⅰ及びⅡ ⑤集中講義などの調整	100%	1,2は計画通り実施できた 全学教務委員会の報告及び審議事項について、タイムリーに報告,検討した。 8月より【1】について科目担当表を提示し,時間割作成について協議した。10月より【2】について全学年のスケジュール調整を実施した。 令和7年度の基礎ゼミとアリー・エクスポージャーについて早期から検討を開始し,授業目的を明確化した。	今年度から導入されたアセスメントについて全学教務委員会の指示のもと,7月にIR推進室担当教員より説明会を実施した。 新カリキュラムに係る課題が明確になった。	1. 令和8年度に向けた全学教務委員会提示のカリキュラム改定の方針の共有および検討 ①コンピテンシーの共通認識 ②全学部における基礎教養科目 2.新カリキュラムにおける4年間の課題抽出 ①2年次の授業の見直し ②4年次の時間割に係る科目の見直し 3.コアカリキュラム改定に向けて共有および課題抽出

看護学科 PDCA表

令和6年度	(臨地実習専門委員会)PDCA表		PLAN (計画) の内容：臨地実習全体の計画立案と実習調整および管理を行う。また、領域・教員間、及び実習施設との連携を図り、学習効果の高い実習環境を提供する。		
PLAN (計画)	DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率 (%)	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
<p>1) カリキュラム全体を見通した臨地実習計画の検討と調整</p> <p>2) 新カリキュラム移行初年度の領域実習の円滑な実施と評価、次年度に向けての検討、調整</p> <p>3) 実習配置に応じた実習ローテーション表、臨地実習共通要項、臨地実習要項の作成</p> <p>4) 領域間における教員の連携、実習環境の調整</p> <p>5) 各実習施設との連携と実習環境の調整</p> <p>6) インシデント・アクシデント事例に対する適切な対応と事例の集約</p>	<p>1) 教務委員会、領域長会議と連携しカリキュラム全体における授業科目としての臨地実習の位置づけの確認</p> <p>2) 新カリキュラムに伴う実習配置の検討、共通要項の進級要件の検討、及び各実習における目標、実習内容の検討</p> <p>3) 月1回の臨地実習専門委員会を開催し、領域間の連携、情報共有、教員の実習指導能力の向上を図る</p> <p>4) 実習委員会、領域長会議において、実習状況の報告による情報共有と連携を図る</p> <p>5) 各実習施設との総括会議の開催における実習評価と今後の実習展開の検討</p> <p>6) インシデントレポートの集約を行い委員会で提示、重要事例においては、領域長会議での情報共有を図る</p>	<p>95%</p>	<p>1) 前年度の課題から、他学年の実習期間に3年領域実習が重複しないように計画し、学部内教員が他学年の実習に協力し、かつ3年次必修科目の集中講義ができるようにした。</p> <p>2) 17期生の実習においては、6月開始の3月中旬までの実習時期であり、3年後期の選択科目の受講に影響し、また進級判定が遅れることになった。また実習開始までの期間がまちまちであり、4月から2ヶ月空いた場合もあり、検討を要した。18期生の実習ローテーションは、その反省をもとに5月開始とし、1月中に全領域の実習が終了できるよう計画した。</p> <p>3) 毎月の委員会において、実習状況における情報の共有を行い、体調不良による欠席に伴う追実習や課題のある学生についての対応を検討し、領域間で連携を図ることに努めた。</p> <p>4) 各委員会において、実習状況の情報提供と共有を行い、連携に努めた。</p> <p>5) 各実習施設との総括会議については一覧表を作成、Teamsで共有、領域間で調整し適宜開催、実習評価を行った。またCOVID-19に関する感染対策については、引き続き、各施設と調整を行い、臨地での実習が実施できるように努め、実習環境の提供を行った。</p> <p>6) 本年度は、個人情報保護に関するインシデントが多く発生したため、「臨地実習共通要綱」の内容を加筆修正した。その要因としては、臨地実習前に「医療安全学」を受講していないことが影響していると考え、カリキュラム変更時に3年前期科目とするよう提言した。</p>	<p>* 全年度の課題をもとに、実習ローテーションを計画し、作成することができた。その結果、3年生の授業科目を考慮することができた。</p> <p>* 次年度は他学年の実習期間と領域実習が重複しないように計画、実施したことから、学部教員が他学年の実習に参加することが可能になった。</p> <p>* 実習期間が前年より短かったため、追・再実習を3年次に調整することができなかった。進級には問題なかったが、数名が4年次での追実習となった。</p> <p>* 個人情報保護に関わるインシデントの発生があったが、そのことで学部として「臨地実習共通要綱」の修正が行われ共通認識をもつことができた。</p>	<p>* 令和8年度のカリキュラム変更に向けて、3年前期に領域実習開始前に受講すべき科目が設定されることから、実習開始時期の再検討が必要である。</p> <p>* 今年度も、実習委員会と教務委員会、領域長会議との連携を図ることができたが、実習に関わる教員の指導力向上に向けた取り組みが十分とはいえ今後検討を要する。</p> <p>* 実習施設との連携については、領域実習の開始が早まっている(5月)ため、総括会議の開催次期、方法については個別の対応が必要となる。</p> <p>* 今年度も、COVID-19感染のため実習中止となる学生が散見した。また、実習施設でクラスが発生し、急遽実習施設の調整が必要になった領域もあり、感染状況については依然として楽観は許されず、学生、教員の体調管理は引き続き行っていく必要がある。</p>

## 看護学科 PDCA表

目的：大学広報委員会と連携し、看護学部学生募集に係る企画および運営を行う

令和6年度	(広報委員会)PDCA表		PLAN (計画) の内容：		
PLAN (計画)	DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率 (%)	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
1. オープンキャンパスにおいて学部紹介を参加者が体験しながら本学学部を理解できるように実施する 2. 高校ガイダンスにて複数の教員で対応し、特に本学周辺の高校には積極的に働きかける 3. インスタグラムのフォロワーを増やして本学部の認知を広め、社会的周知を図る 4. 看護学部周知動画の撮影を行い、オープンキャンパスの待ち時間での上映や大型施設での高校生への説明会等に使用し、本学の周知を図る 5. 高校訪問の実施は、入学につながる京都府丹後・中丹地域を中心に訪問し、近隣の高校生への周知と共に地域共生としての一助となるように啓発を行う	1. オープンキャンパスの学部紹介を広報委員が中心に学部紹介を行い、その時々々のテーマに即して参加者が参加できるように実施した。実施内容としては、シュミュレーターを使用した心肺の聴診法を学生ボランティアとともに実施した。また、手洗いの体験や車いす体験なども実施した。7月、8月の保健師・助産師コースの特化型の説明会も実施した。 2. 学部教員の減少に伴い、本年度の実施は回数を減らしたが、高校生に対しての模擬授業を中心に実施した。 3. 2月13日現在、フォロワー487人と増加。本年度の投稿は16件であった。 4. 今年度は実施していない。 5. 南丹高校や須知高校など近隣の高校に実施した。	100%	1. リクルートの指導もあったが、広報委員が中心となって学部説明を行ったが、説明に慣れない教員もいた。また、ボランティア学生も特に1年生では、10号館の使用していない部屋もあったようで、その説明ができないことがあった。保健師・助産師コースの特化型説明会は、その半数以上が通常の看護コースの参加者でもあったことから、希望しない者への課題がある。 2・5. 高校訪問はできるだけ近隣のアクセシビリティを考えた実施となった。 3. 写真を添付するための手続きが煩雑であり、個人情報保護を遵守するために気を遣うため、写真をいただいて即座の繁栄にはつながりにくい。広報委員や教員が中心となって写真を取捨するが、その時々々の学生目線の生きた写真、その躍動には繋がっていない。 4. 本年度は、4学科でのシュミュレーションを実施できた。今後もさらに地域へと輪を広げるべく企画が必要である。	1. 大学広報委員会の決定に従い、学生委員の選出により、より学生目線の「将来の描ける大学生像」を目指す必要がある。参加する学生が「楽しい」と思えるオープンキャンパスの運営こそ、参加する生徒たちに響くはずである。 2・5. 高校訪問は引き続き近隣を中心に実施しながら、本学の周知に勤める。また、できるだけ本学独自の特徴を伝播する必要がある。近隣の高校生たちにてであれば、車通学が可能であることでアクセシビリティの解消を図る。 3. オープンキャンパスの学生運営委員と共同して広く学生からもキャンパスライフを象徴する写真を収集し、広報する。 4. オープンキャンパス学生運営委員と協働して広く知ってもらうための活動につなげたい。	

看護学科 PDCA表

令和6年度	(卒業研究調整委員会)PDCA表		PLAN (計画) の内容:		
PLAN (計画)	DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)
P:目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率 (%)	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由/課題/根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
1.卒業研究計画書集の作成に向けて計画を立案、実施する。 ①活動方針と年間計画の作成(4月) ②4年生(16期生)提出期限、提出先の確認 ③4年生(16期生)看護師コース卒業研究計画書原稿・評価の取りまとめ(7月) ④4年生(16期生)保健師・助産師コース卒業研究計画書原稿・評価の取りまとめ(8月) ⑤3年生(17期生)学生配置案の検討・修正(1月)⑥3年生(17期生)研究倫理e-ラーニング受講の徹底 ■委員会の開催 4月・7月・8月・9月・3月・随時 ■次年度への課題の確認 ■12月研究方法論講義終了後卒業研究に関するオリエンテーションを実施する。(執筆要領・記載用フォーマット・ループリック評価表配布)	1.左記の計画に基づき、委員会を開催し、年間の活動を進めた。【16期生】・退職教員の研究指導引継ぎ 学生8名→教員3名・16期生:卒業研究の提出確認 看護師コース:58名 保健師・助産師コース:18名 看護師コースの学生1名が期限に作成できず、白紙提出となった。学部長の判断で、保助コースの期限に提出を求め、提出内容を確認し受理した。その他、不備な内容については、指導教員を通じて、再度の提出を求めた。・16期生:e-ラーニング受講の確認 研究支援担当からの案内、受講状況の確認を継続している。	100%	1.16期生の卒業研究の提出期限内に、作成ができなかった学生について、再提出を求める前提で、白紙でも提出するように指導した。再提出を求め、アドバイザーの支援も受けて、再提出となったが、内容については本人の執筆内容とは思えない内容で、評価しがたいものであった。しかし、規定により再提出で60点として処理がされた。	1.今後、提出期限内に提出できない学生への対応について整理が必要。さらに内容について、本人の執筆内容かどうかの精査も必要ではないか。	1 生成AIを使用して、研究計画書作成したと考えられる学生への対応について検討が必要。

看護学科 PDCA表

令和6年度	(卒業研究調整委員会)PDCA表		PLAN (計画) の内容:		
PLAN (計画)	DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)
2. 指導教員の配置に関する調整を実施する。①17期生に向けて指導教員の配置案の作成(4月～5月)②各指導教員の研究テーマ調査と学生への提示(9月から開始)③領域別学生配置表の作成※2月領域長会議にて承認を得る	2. 卒業研究における指導教員の配置調整を行った。【17期生】研究方法論講義が12月末になり開始が遅れた・領域別配置数を12月の領域長会議にて確認の上決定した。17期生・留年生含む60名・12月24日研究方法論講義終了後、卒研オリ実施。学生に対し希望領域の調査をgoogleフォームで実施し、2月の領域長会議にて領域別学生配置の承認を得て、ゼミスタートとなった。	100%	2 17期生については、研究方法論の講義が12月になったことから、講義と卒研オリエンテーション、希望領域調査との連動が求められ、その調整に労力を要した。さらに卒ゼミ開始が2月となり、従来より4か月短縮された。	2 期間短縮されたことから、期間内に終了できるかどうか大きな問題である。	2 学生の力量を考慮すると、研究計画書作成の期間として、従来の約10ヶ月の確保は必要と考える。17期生の提出状況と退出内容により、次年度以降の研究方法論講義時期について、再検討を要する。
3. 執筆要領、フォーマットの見直し、ルーブリック評価表の使用評価①指導教員への聞き取り②修正等の必要性について検討を行う	3. 執筆要領、研究計画書・文献一覧の見直しルーブリック評価について、指導教員の意見を踏まえ、修正を行った。指導教員、対象学生へ上記の書式を配布し、動画を作成の上、googleクラスルームにて周知を図った。	100%	3 執筆要領・研究計画書・文献一覧の修正、特にルーブリック評価については、指導教員からルーブリック評価が甘すぎるという意見があったので、学生の主体性を評価できる内容に変更している。	3 ルーブリック評価については、領域長会議で検討しながら、大幅に見直し改訂版を作成できたことは大きな成果である。	3 ルーブリック評価については、実施後、指導教員の意見を聴取して、さらに改善に向けて検討していく必要があると考える。

大学院 鍼灸学研究科 鍼灸学専攻PDCA表

令和6年度		鍼灸学科 (大学院鍼灸学研究科) PDCA表		PLAN (計画) の内容：通学制、通信制の修士課程および博士課程の定員充足を目標としつつ、研究内容の充実を図る。また、通信制大学院では大学院生同士だけでなく教員との交流も少ないことから、今年度より公開発表会を対面で実施するように準備を進めていく。このことにより、近年多様化する研究テーマや研究内容について学びを深めることを目的とする。加えて、分野の多様化に合わせて英語論文を読む必要性もこれまで以上に高まっていることから、英語教育についても指導を強化していく。	
PLAN (計画)	DO (実行)	CHECK (評価)		ACTION (次への改善)	
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率 (%)	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
1.定員充足を目的に進学説明会を開催 2.指導教員と受験希望者との調整実施 3.公開発表会の対面実施の準備 4.英語関連科目の内容充実	1.オープンキャンパスなどと連動し、進学説明会を実施するとともに、在校生に面談を通して大学院進学の希望について聴取する。 2.募集要項を整理し、受験希望者と面談を進める。その上で、出願に向けた調整を実施する。 3.対面での公開発表会の実施について年度の初めに大学院生や教員に案内すると共に、日程を通達する。 4.卒業生アンケートの項目で低値を示している「英語力の向上」について解決するため、授業内容について科目担当者と打合せをする。	100%	1.進学説明会を実施し、在校生に対する進学希望社のリストアップを完了した。 2.募集要項の作成を完了した上ですべての受験希望者と受験に向けての調整を行った。 3.今年度卒業生ならびに大学院教授に対して対面での公開発表会について連絡し、多くの参加者の中で発表会を実施した。 4.卒業生アンケートにて「英語力の向上」の得点が向上・改善した。	1.進学説明会参加者名簿と学生面談記録、2.受験希望者との面談記録ならびに受験者一覧、3.公開発表会参加者リスト、4.卒業生アンケート	1.進学説明会が1回のみ開催のため参加できない学生がいた。次年度は複数回の開催が必要である。 2.受験者の受け皿を広げられるよう、指導教員の拡充が必要である。 3.公開発表会に参加する教員数がまだ少ないため、より早期から教職員に案内する必要がある。 4.その他の科目についても適宜更新が必要である。

大学院 保健医療学研究科 柔道整復学専攻 PDCA表

令和6年度	柔道整復学専攻 (大学院保健医療学研究科) PDCA表		PLAN (計画) の内容： 目 標：1. リサーチクエストの構造化の明確化、2. 体系的な研究計画の立案 課 題：1. 研究の質の担保（目標1, 2）、2. 入学者の増加（学内、外）	
PLAN (計画)	DO (実行)		CHECK (評価)	ACTION (次への改善)
P: 目標を実現するための具体的な方法を考える	D: 計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率 (%)	C: 目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由/課題/根拠データ等
1. 研究の質の担保 (1)院生の研究進捗状況報告会の定期的開催 (2) 院生対象の論文抄読会（ジャーナルクラブ）の定期的開催 2. 入学者の増加 ①柔道整復学科生が「探求すること（わからなかったことがわかる!）」の楽しみを体験する時間設定を依頼する。 ②柔道整復学科に4年生の卒業研究「学会発表」の依頼する。 ③院生の学会発表	1. (1) は、月1回（対象院生は1人/回を目安）、(2) は1回/週実施。 ルーブリック、コンセプトマッピング、ポートフォリオを用いた、自己・他者評価で効果を測定。 2. 入学者の増加 ①、②柔道整復学科に「探求することの楽しさ」体験学習や「卒業研究の学会発表」を依頼。 ③学外に向けた広報活動の充実	70% 80% 50% 70% 50%	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。 ・ルーブリック、コンセプトマッピング、ポートフォリオの評価表の作成ができなかった。 ・進捗報告会（中間報告会）は1回開催できた。 ・論文抄読会は1回/週でほぼ実現できる。 ・依頼した柔道整復学科4年生の卒業研究会（日本柔道整復接骨医学会学術大会、地方大会）発表は、今年度4件。少しずつではあるが毎年増加してきている。	なし A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。 ・研究進捗状況の見える化を図る。 ・ルーブリック、コンセプトマッピング、ポートフォリオの評価表を作成し、見えるかを勧める。 ・柔道整復学科に4年生の卒業研究会発表を依頼する。

PDCA表

大学院 保健医療学研究科 保健学専攻

令和6年度		(保健医療学研究科保健学専攻) PDCA表		PLAN (計画)		DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)	
I 課題：研究の質が担保できていない 目標：大学院生・修士生の学会発表数や論文掲載数が増える				PLAN (計画)の内容：専門基礎科目及び専門科目との連携を強化し、研究に必要な知識と技術の修得を促す。その上で研究計画書の作成過程で公聴会を実施し、計画書を洗練するプロセスを構築する。また倫理審査申請書の研究方法の内容吟味を十分に行う。提出締め切りまでに論文作成指導に時間的余裕を確保し、仕事と研究の両立が図れるように支援する。在学中または修了後に大学院生・修士生の学会発表や論文投稿を支援する。							
P：目標を実現するための具体的な方法を考える		D:計画を実行しその効果を測定する。		計画実施率 (%)		C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。		評価の理由/課題/根拠データ等		A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。	
1. 専門基礎科目及び専門科目との連携を強化し、研究に必要な知識と技術を修得する 2. 研究計画書の作成過程で公聴会を実施し、計画書を洗練する 3. 倫理審査申請書の内容吟味を十分に行う 4. 提出締め切りまでに論文作成指導に時間的余裕を確保する 5. 大学院生・修士生が学会発表や論文投稿を行う		1. 研究計画書を記載する基礎的な能力を修得する 2. 研究計画書の公聴会を開催し、必要に応じて教育的指導を行い、必要な修正を促す 3. 特に人を対象にした研究では研究計画書に倫理的配慮が十分に行われているか吟味したうえで、倫理審査に申請する手順を構築する 4. 教授会学位判定の不可が減る 5. 学会等発表数や掲載論文数が増える		1. 優以上 100% 2. 参加 100% 3. 手順を踏む実施率100% 4. 不可判定 0% 5. 修了前後の学会等発表 1件、掲載論文 1件		1. 学生の理解度や学修内容の研究計画書への反映を質的に分析評価する 2. 公聴会への学生参加及び意見交換を量的及び質的に評価する 3. 倫理審査申請書に関する指摘状況を評価する 4. 研究指導の状況を聞き取り調査する 5. 在籍中・修了後の発表数、論文数を評価する		1. 研究計画書の進捗を複数の関連領域研究者でチェックし反映 2. 定期的な公聴会、発表練習等で室を担保 3. 指摘を修正に反映 4. 聞き取り等により状況を分析した 5. 発表実施 1、次年度投稿準備		1. HPトピックスに掲載する教員研究業績数の増やし、研究内容の周知を図る 2. ゼミにおいて関連教員と意見交換を、計画書、倫理審査申請書のブラッシュアップを図る 3. 仕事との両立を図るため状況を定期的に確認し、必要に応じて長期履修制度活用を促す 4. 仕事との両立を勘案し、院生と相談の上スケジュールの柔軟な見直しを図る 5. 学位論文の内容を発表する意識付けと発表、投稿できる質を担保し、修了後も含め計画的に準備を図る	

令和6年度		(保健医療学研究科保健学専攻) PDCA表		PLAN (計画)		DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)	
II 課題：修士課程定員数が確保できていない 目標：定員数を充足する				PLAN (計画)の内容：研究成果をHP等で積極的に公表し、教員の研究活動、指導内容を周知し、院生を勧誘する。看護学、救命救急学、柔道整復学他の卒業生、北部地域関連機関等に大学院の広報を行う。また大学教員等に大学院の広報を行う。3年の間隔で定員充足率を評価し、修士課程の定員削減(3名)を検討する。学科で卒業研究を実際にも実施し、学部卒業までに研究の楽しさを体験する機会を設け、進学意識の高揚を図る。							
P：目標を実現するための具体的な方法を考える		D:計画を実行しその効果を測定する。		計画実施率 (%)		C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。		評価の理由/課題/根拠データ等		A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。	
1. 研究成果をHPで積極的に公表し、教員の研究活動、指導内容を周知し、院生を勧誘する 2. 看護学、救命救急学、柔道整復学他の卒業生、北部地域関連機関等に大学院の広報を行う 3. 大学教員等に大学院の広報を行う 4. 3年の間隔で、定員充足率を評価し、修士課程の定員削減(6名→3名)を検討する 5. 学科で卒業研究を実際にも実施し、学部卒業までに研究の楽しさを体験する		1. HP新着情報の研究情報(学会賞、論文、学会発表等)の掲載状況を評価する 2. 広報誌の発送数、発送場所、到達状況および教員への周知状況を評価する 3. 大学教員等の入学者、学位取得状況を評価する 4. 定員充足率や卒業生及び教員の入学数を評価し、修士課程定員の増減を検討する 5. カリキュラム変更時に卒業研究の実施を位置づける		1. HPに掲載された論文数(5)学会発表(10)等 2. 広報誌発行数増 3. 修了率 100% 4. 定員充足率 修士課程 70% 博士課程 100% 5. 卒業研究実施率(100%)		1. 研究成果の実態を把握し、論文掲載等を広報課への報告を義務付けて、広報課がHPに掲載する 2. 卒業生、近隣病院等、発送場所、発送数、到達状況等、周知度を分析する 3. 学科別、所属別に入学者及び学位取得率を評価する 4. 経年的に定員充足率を評価し、修士課程の充足率より適正な定員数の再検討を行う 5. 卒業研究を実際にも実施する		1. 広報課と調整し掲載数を確認(3件) 2. 広報誌に卒業生に院生、仕事と両立を掲載 3. 退学者はなく、最初に修士取得者3名 4. 修士課程(6名)の充足率が50%以下 5. 数年内に卒業研究を実施に実施する体制になる		1. 広報と連携し教員に周知し、論文掲載、学会発表を必ず報告掲載する 2. 広報誌に仕事と両立した院生、長期履修制度の周知、修論の内容を行う 3. 学内の学位取得者(率)を評価し、学位取得を勧奨し、また卒業生に勧誘する 4. 修士課程の充足率を高めるために、定員を柔道整復学専攻と同程度に変更する案を検討する 5. カリキュラム変更時に教育課程に盛り込む	